

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
101	政治学演習 (縣公一郎)	通年	3年以上：4単位	縣 公一郎 政政・経演・国演

副題
Subtitle

公共政策研究

授業概要
Course Description

今日の社会生活で、政府活動の影響はあらゆる分野に及んでおり、私たちは政府活動との関連なくして一刻も生活を営めない、と言って過言でないだろう。従って、社会的諸関係構築のための戦略、計画、プログラム、個々の意思決定、具体的活動としての公共政策を通じて、政府が、なぜ如何なる行為を如何にして社会にもたらしているのかという点は、現代社会において問うべき重要な課題だろう。

本演習は、かかる政府活動の分析で基礎となる手法の学修と、その応用を目指すものである。

3年次春学期は、公共政策関連の内外文献を用いた報告や他大学との合同ゼミに向けた共同研究で基礎学修を進めつつ、各人の個別テーマ確定に努める。

3年次秋学期以降は、設定された個別テーマに関する研究と報告を経て、最終的にゼミナール論文を作成する。各人が研究対象とする国ないし地域（例えば、首都圏、日本、ドイツ、EU等）と、採り上げる政策領域（例えば、マルチメディア、通商産業、学術教育、国土、医療、農業、環境、交通、都市、労働等）もしくは政府・行政機構を、ある程度明確に設定しておいて頂きたい。その際、国際的枠組（例えば、ドイツのテレコム政策ならEU、日本の通商産業政策ならWTOや対米関係）を十分に意識してほしい。原則として3年と4年は別々の会合を持つが、相互に交流を図るため、火曜日 限と 限をゼミナールの共通時間として確保して頂きたい。

授業の到達目標
Objectives

各人のゼミナール論文完成。

授業計画
Course Schedule

第1回：ガイダンス
第2回 - 第28回：学生による報告・討論
第29回 - 第30回：ゼミ論総括報告

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s)

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	40 %	共同研究への貢献と日常的発言。
その他 Other	60 %	ゼミナール論文。

備考
Note

関連URL
URLs for References

<http://www.pprs-waseda.com/>

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
102	政治学演習 (飯島昇藏)	通年	3年以上：4単位	飯島 昇藏 政政・経演・国演

副題
Subtitle

リベラリズムとは何か？

授業概要
Course Description

リベラリズム（自由主義）は、その他の政治的語彙、なかんずく、さまざまな ism のなかでも、最も論争的な概念の一つであるといえる。リベラリズムをめぐる、たとえば、次のような問題群がたちあられる。リベラリズムとは何かを理解するためにはどうするのが最も良いのだろうか。リベラリズムはそれ自身で最も良く理解できるのだろうか。それとも、それは、その他の主義、たとえば民主主義や社会主義やファシズムなどとの比較のなかでも最も良く理解されるのだろうか。リベラリズムは近代や現代の独占物であるだろうか。それとも、リベラリズムは古代や中世にも存在したのであるだろうか。存在したと言えれば、それらはどのような実体をもち、どのようなあられ方をしたのであるだろうか。あるいは、近代的リベラリズムの創始者とはだれであるだろうか。

この演習では、リベラリズムとは何かという問いに、レオ・シュトラウスの『リベラリズム 古代と近代』の講読を通じて、接近する。リベラル・デモクラシーの友を自認したシュトラウス自身は政治的な保守主義者であったが、かれの古典研究を通して、リベラリズムに阿らない、リベラリズム理解が得られるかもしれない。

授業の
到達目標
Objectives

古典の可能な限り正確な読解を通して、主題について単に知識を獲得するだけでなく、主題について論理的な議論をすることによって、さらに問題の深い理解に到達することを目指す。

授業計画
Course Schedule

第1回：『リベラリズム 古代と近代』の「序文」
 第2回：第1章“What Is Liberal Education”の講読と討論
 第3回：第2章“Liberalism and Responsibility”の講読と討論
 第4回：第3章“The Liberalism of the Classical Political Philosophy”の講読と討論（1）
 第5回：第3章“The Liberalism of the Classical Political Philosophy”の講読と討論（2）
 第6回：第4章「『ミノス』について」の講読と討論
 第7回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（1）
 第8回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（2）
 第9回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（3）
 第10回：第5章「ルクレティウスについての覚え書き」の講読と討論（4）
 第11回：第6章「いかにして『迷える者の手引き』の研究をはじめるか」の講読と討論（1）
 第12回：第6章「いかにして『迷える者の手引き』の研究をはじめるか」の講読と討論（2）
 第13回：第7章「パドゥアのマルシリウス」の講読と討論
 第14回：第8章「エピローグ」の講読と討論
 第15回：第9章「『スピノザの宗教批判』への序言」の講読と討論（1）
 第16回：第9章「『スピノザの宗教批判』への序言」の講読と討論（2）
 第17回：第10章「善き社会に関する諸々のパースペクティヴ」の講読と討論
 第18回 - 第30回
 第18回から第30回までは、演習参加者各人の研究報告と議論を予定している。また、シュトラウスのその他の著作『ホップズの政治学』や『僭主政治について』などの講読も考慮している。
 夏合宿（2泊3日）での集中演習も予定している。
 上記は、ゼミ生の興味関心などで、若干の変更（順序などの）がありうる。

教科書
Textbook(s)

石崎嘉彦・飯島昇藏ほか訳『リベラリズム 古代と近代』（ナカニシヤ出版、2006年）ほか

参考文献
Reference Book(s)

添谷育志・谷 喬夫・飯島昇藏訳、レオ・シュトラウス著『ホッブズの政治学』（みすず書房、1990年）
石崎嘉彦・飯島昇藏ほか訳、レオ・シュトラウス著『僭主政治について』（上）（下）（現代思潮新社、2006年、2007年）

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	ゼミでのプレゼンテーションを含む。
平常点評価 Class Participation	60 %	ゼミへの出席、討論への貢献度など。
その他 Other	20 %	合宿やゼミコンパへの参加など。

備考
Note

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
103	政治学演習 (梅森直之)	秋学期 (週2回)	3年以上：4単位	梅森 直之 政政・経演・国演

副題
Subtitle

近代日本の政治思想

授業概要
Course Description

われわれが現在暮らしている日本は、いったいいかなる来歴をへて、現在あるようなかたちになったのか。そしてそこにはどのような特徴があり、どのような問題があるのか。本ゼミナールでは、グローバルな歴史との連動を意識しながら、現代の日本を理解するうえで重要な政治思想の系譜を概観する。明治維新、自由民権運動、日清・日露戦争、台湾と朝鮮の植民地化、第一次世界大戦、満州事変と日中戦争、太平洋戦争の開始と敗戦、高度経済成長と安保闘争、グローバリゼーションと格差社会、これらは、資本主義とナショナリズムの変動を示す指標であり、またある場合にはその原因ともなった事件であった。日本の知識人たちは、こうした事件とともに、次第に顕在化する、階級やジェンダー、都市と農村、植民地と本国のあいだの矛盾や対立を問題化しつつ、そうした矛盾や対立を解決する方策を模索してきた。本ゼミナールでは、そうした矛盾や対立が、人びとにどのように経験され、そしてそこからどのような思想が生み出されたかを、明治維新から現代にいたるまでの代表的な日本の知識人のテキストをともに読み、議論することで、検証してゆく。

授業の
到達目標
Objectives

テキストの「読み方」の習得
自分の考えを効果的に伝える「書き方」の練習
生産的に「議論する」訓練

授業計画
Course Schedule

※ 専門演習の「授業計画」は、募集の時点でホームページ等で公開しますので、必ず記載してください。

- 第1回：イントロダクション：「歴史」とは何か。現在問われるべき「問題」は何か
第2回：オンリー・イエスタディ（1980年代）：バブル経済下の学生生活の変容
第3回：安保から高度成長へ（1960年代、70年代）1：反公害闘争と民衆史
第4回：安保から高度成長へ（1960年代、70年代）2：反植民地闘争と安保闘争
第5回：戦後民主主義とは何か（1950年代、60年代）1：近代主義と近代化論
第6回：戦後民主主義とは何か（1950年代、60年代）2：主体性と戦争責任
第7回：占領と改革（1940年代）1：民主化の時代
第8回：占領と改革（1940年代）2：世界史のなかの占領
第9回：戦争の理念・戦争の思想（1930年代、40年代）1：戦争の記憶
第10回：戦争の理念・戦争の思想（1930年代、40年代）2：近代の超克
第11回：満州国の理想と現実（1930年代）1：東亜共同体から大東亜共栄圏へ
第12回：満州国の理想と現実（1930年代）2：植民地なき帝国主義
第13回：中間考察
第14回：資本主義と不均等発展（1920年代）1：大正デモクラシーの光と影
第15回：資本主義と不均等発展（1920年代）2：モダンガールの光と影
第16回：資本主義と不均等発展（1920年代）3：革新主義の台頭
第17回：植民地支配の理想と現実1：台湾 植民地統治の始まり
第18回：植民地支配の理想と現実2：台湾 自治政府への希求とその意義
第19回：植民地支配の理想と現実1：朝鮮 皇民化政策の来歴
第20回：植民地支配の理想と現実2：朝鮮 独立運動の展開
第21回：「社会」と「個」の発見（1910年代）：天皇機関説と民本主義
第22回：初期社会主義とその時代（1900年代）1：日露戦争とその批判
第23回：初期社会主義とその時代（1900年代）2：社会問題の発生と初期社会主義
第24回：乱反射するオリエンタリズム1：和辻哲郎、近衛文麿、岡倉天心
第25回：乱反射するオリエンタリズム2：樽井藤吉、福沢諭吉、大井憲太郎
第26回：国家建設期の思想史的問題1：文明論
第27回：国家建設期の思想史的問題2：自由民権論
第28回：「近世」とは何か1：徳川儒学の可能性
第29回：「近世」とは何か2：近世のなかの近代
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

別途指示する。

参考文献
Reference Book(s)

梅森直之編著『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』（光文社、2007）
ハリー・ハルトゥーニアン『近代による超克』（岩波書店、2007）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備考
Note

これまでの基礎知識は問いませんが、これからの学習に対する強い意欲と好奇心ならびに知的柔軟性と持久力が必要です。無断欠席3回以上で、評価の対象から外します。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
104	政治学演習 (大浜啓吉)	通年	3年以上：4単位	大浜 啓吉 政政・経演・国演

副題
Subtitle

公共政策と行政法

授業概要
Course Description

行政権は市民社会の機能不全を正すために公共政策を策定の形をとって市民社会へ介入し、政策を実施します。公共政策の多くは法律の形式をとりますが、予算、計画、政省令、行政規則、通達等の複数の法形式に分散して表現されます。しかし憲法の枠を越えた政策は違憲となり、裁判所によって破棄されます。この演習では、憲法と行政法の基礎知識を身につけながら現実の裁判例を素材に公共政策の問題を行政訴訟の角度から勉強していくことにします。留学のため2年間ゼミを休みましたが、再開します。

最初の数回を「市民社会と行政法」と題して基礎知識についてレクチャーし、その後、事例問題を素材に報告と議論をしたいと思います。将来(卒業時)の各人の研究のテーマ選択はまったくの自由です。挑戦すべき課題の例としては、自治体行政(分権政策)、まちづくり・開発行政、環境政策、福祉行政、財政金融政策、教育政策、年金改革や特殊法人改革、警察行政など沢山あるでしょう。議論を通して自らを磨きたいと思う熱意ある人の参加を期待しています。

4年生のゼミ論については、折り折りに3年生にも報告を聞いてもらいます。もちろん議論には大いに参加してください。

授業の
到達目標
Objectives

行政法の基礎を身につけること。

自分の興味あるテーマ(公共政策)につき、知識を深め、論文作成力を身につける。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：市民社会と市民法(民法)の原理(1)
- 第2回：市民社会と市民法(民法)の原理(2)
- 第3回：市民社会への国家・行政の介入
- 第4回：産業廃棄物処理施設反対事件(No. 3)
- 第5回：報告、討論、コメント
- 第6回：アイヌの聖地ダム事件(No. 4)
- 第7回：報告、討論、コメント
- 第8回：生活保護打ち切り事件(No. 10)
- 第9回：報告、討論、コメント
- 第10回：児童扶養手当打ち切り事件(No. 11)
- 第11回：報告、討論、コメント
- 第12回：パチンコ店建設反対事件(No. 14)
- 第13回：報告、討論、コメント
- 第14回：再開発反対事件(No. 15)
- 第15回：報告、討論、コメント
- 第16回：廃棄物大量不法投棄事件(No. 16)
- 第17回：報告、討論、コメント
- 第18回：タクシー運賃値下げ事件(No. 17)
- 第19回：報告、討論、コメント
- 第20回：内申書開示事件(No. 18)
- 第21回：報告、討論、コメント
- 第22回：用地買収情報開示事件(No. 19)
- 第23回：報告、討論、コメント
- 第24回：談合監査事件(No. 19)
- 第25回：報告、討論、コメント
- 第26回：米軍基地土地収用事件(No. 21)
- 第27回：報告、討論、コメント
- 第28回：胃腸薬傷害事件(No. 6)
- 第29回：報告、討論、コメント
- 第30回：河川水害事件(No. 9)

教科書
Textbook(s)

市川正人・曾和俊文・池田直樹編「ケースメソッド公法（第2版）」（日本評論社）

参考文献
Reference Book(s)

大浜啓吉著『行政裁判法』（岩波書店・2010年）、同『行政法総論（新版）』（岩波書店・2006年）。その他、必要な文献等はその都度、言及します。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	90 %	出席を最重視する。
その他 Other	10 %	熱意・筋の通った議論などができるか。

備考
Note

試験の答案のレベルが近年とても低く、学生の文章力と教養の低下が著しいので、04年度から、毎年若干の「新書」を読ませ、レポートを書かせることにしています。新書は、教師が良書と考えるものを選択しています。レポートには評価（A・B・C）を付けて返却します。みるみる力がついてきているように思います。「その他」として評価の対象とする。

関連URL
URLs for References

<http://www.waseda.jp/sem-ohama01/top.html>（大浜ゼミナールホームページ）2年近く更新していません。僕には能力がないので、ホームページ担当者を早く決めたいと思っています。

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
105	政治学演習 (川岸令和)	通年	3年以上：4単位	川岸 令和 政政・経演・国演

副題
Subtitle

日本国憲法の現在

授業概要
Course Description

日本国憲法は、敗戦という現実がもたらした新しい時代の新秩序を構成すべく制定された。その新秩序は、基本的人権・国民主権・平和主義の実現という構想を基軸にして展開されることとなった。これらの概念は日本史上根本的に新規なものである。またこの憲法は初めて広く討議に付され制定された。そのときから日本国民は自らの政治運営による正統性の探求という終わりなき旅を始めたのであった。60年余を経た現在、その約束は果たされているであろうか。

本演習は、新しい時代の新しい政治の科学として誕生した日本国憲法に関する判例・学説の現在の到達点を把握すること、そしてそのさらなる発展の可能性を問うことを目的とする。方法としては、法解釈学とそれを支える政治・思想・歴史的アプローチとを行きつ戻りつしながら進めていく。日本国憲法の可能性を問うことは、我々の過去を顧み、未来を構想することである。我々は集団としてどのような人間でありたいと考えているのであろうか。

憲法を勉強しようとする際には、感性が豊かで、人間や社会問題に幅広く関心を抱いていることが重要である。現時点での憲法に関する知識は問わない。温かい心と冷静に議論しようとする姿勢をもつ諸君の参加を希望する。

授業の到達目標
Objectives

日本国憲法をめぐる判例と学説の現在の到達点を理解し、さらなるリベラル・デモクラシーの深化を構想することを目標とする。具体的には、4年次に大学生生活の集大成となるゼミ論文をまとめることである。

授業計画
Course Schedule

第1回：開講に当たって
第2回：戸松『プレップ 憲法』第3版を読む
第3回：戸松『プレップ 憲法』第3版を読む
第4回：尊属殺重罰規定違憲判決を読む
第5回：尊属殺重罰規定違憲判決を読む
第6回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第7回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第8回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第9回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第10回：棟居ほか『基本的人権の事件簿』第4版を読む
第11回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第12回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第13回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第14回：古関『日本国憲法の誕生』を読む
第15回：前半の理解度の確認
第16回：夏合宿ディベート大会での問題の検討
第17回 - 第29回：受講生と相談の上決定したテキストを読む
第30回：まとめ 期末レポート講評

教科書
Textbook(s)

戸松秀典『プレップ 憲法』第3版（弘文堂、2007年）、棟居快行ほか『基本的人権の事件簿』第4版（有斐閣、2011年）、古関彰一『日本国憲法の誕生』（岩波現代文庫、2009年）、川岸ほか『憲法』新版（青林書院、2005年）、飯島・川岸編『憲法と政治思想の対話』（新評論、2002年）藪下監修『立憲主義の政治経済学』（東洋経済新報社、2008年）ほか。

参考文献
Reference Book(s)

開講時に参考文献一覧を配布する予定である。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考
Note

憲法を未履習のゼミ生は、三年次に必ず履修すること。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
106	政治学演習 (河野勝)	通年	3年以上：4単位	河野 勝 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

現代日本政治の諸問題

授業概要
Course Description

日本の政治を政治学的に考察する。往々にして、現代の日本政治を語る語り口は、評論的でジャーナリスティックになりがちになるが、本演習では理論やモデルをふまえて、政治学的分析の題材として日本政治の諸相をとらえることを心がける。

実際にどのような問題を扱うかは、参加する学生諸君の関心にゆだねる。選挙、政党政治から公共政策、防衛・外交に至るまで、広くかたよりのないトピックを数多く扱えることが理想であるが、教官がプレゼンテーションの内容を押しつけることはしない。しかし、その代わりに、自分の関心のある領域について知識を深めようとするのであるから、教官以上に専門的な情報を提供できるよう、熱心な取り組みが期待される。

なお、政治学的に考えるということは政治的に考えるということと全く異なる知的営為である。ひとりよがりのイデオロギーや特定の規範的価値を前面に押し出すのではなく、価値判断をするための経験的知識や考察を積み重ねることが目的であるとの前提で、演習へ参加してもらう。

授業の到達目標
Objectives

自分の力で、データを集め、事例を分析し、オリジナルで説得力のある議論を展開する能力を身につけること。

授業計画
Course Schedule

第1回：イントロダクション
第2回 - 第8回：教科書輪読
第9回 - 第15回：3年生：卒論ブレインストーミング
4年生：卒論 中間発表
第16回：イントロダクション
第17回 - 第23回：3年生：卒論中間発表
4年生：企業・産業・日本経済レポート
第24回 - 第30回：4年生：卒論最終発表

教科書
Textbook(s)

『アクセス 日本政治論』（平野 浩・河野 勝編 日本経済評論社）2011年

参考文献
Reference Book(s)

『制度』（河野 勝、東京大学出版会）2002年
『アクセス』シリーズ各巻（日本経済評論社）

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備考
Note

学生に対する要望：人生に対して真剣であること。自分を大切に、他人を尊重すること。心身ともに健康であること。

関連URL
URLs for References

<http://kohno-seminar.net/>

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
107	政治学演習 (小原隆治)	通年	3年以上：4単位	小原 隆治 政政・経演・国演

副題
Subtitle 自治・分権を考える

授業概要
Course Description 自治・分権をめぐるさまざまな問題を多面的な角度から考察する。春学期は、参加者がいくつかのテキストを輪読形式で読み進める。今年度は、まず最初に担当教員が最近著した論文を3点検討する。ついで複数の著者の手になる教科書的なテキストを1冊扱い、各自の問題意識を深めてもらう。夏合宿・秋学期は、参加者が春学期の学習を踏まえてそれぞれ関心あるテーマを選択し、テーマ別に編成したグループ単位で研究報告を積み重ねる。秋学期末に、それまでの研究成果を8,000字以上のレポートにまとめて提出する。

ゼミの学習面でも運営面でも、参加者の自主性に大いに期待したい。ゼミもまた「自治」の実践の場だからである。なお、ゼミに出席することは参加者の権利だが、そこには相応の責任がともなう。無断欠席は認められない。また、相当の理由なく各期回数分の3分の1以上欠席した者は、ゼミに参加する権利を自動的に失う。春学期で失格した者は秋学期に参加する権利を持たない。

授業の到達目標
Objectives 自治・分権をめぐる全体的な問題状況を把握する。そのうえで個別具体的な制度・政策・事例のレベルに落として課題を考察する方法態度を身につける。

授業計画
Course Schedule 第1回：ガイダンス
第2回 - 第4回：小原（2010 a / b, 2011 予定）を3回で輪読する。
第5回 - 第14回：磯崎・金井・伊藤（2011）を10回で輪読する。
第15回：今後の打ち合わせ（テーマ別グループ編成など）
夏合宿、第16回 - 第30回：参加者がテーマ別に編成したグループ単位で研究報告を行なう。

教科書
Textbook(s) ・小原隆治「分権・自治をどう進めるか」（山口二郎編『民主党政権は何をなすべきか』岩波書店、2010年 a）
・小原隆治「地域と公共性」（齋藤純一編『公共性の政治理論』ナカニシヤ出版、2010年 b）
・小原隆治「自治・分権とデモクラシー」（齋藤純一・田村哲樹編『アクセス デモクラシー論』日本経済評論社、2011年 予定）
・磯崎初仁・金井利之・伊藤正次『ホーンブック 地方自治（改訂版）』（北樹出版、2011年）
小原（2010 a / b, 2011 予定）は受講者にコピーを配付する。

参考文献
Reference Book(s) 開講時をはじめ随時紹介する。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	通常の試験・レポートと同じ観点から評価する。レポートはS、A、B等の評価結果を明記し、コメントをつけて返却する。
平常点評価 Class Participation	80 %	前述の出席要件を満たしていることを前提として、日頃のゼミへの貢献度を評価する。
その他 Other	%	

備 考
Note

関連URL
URLs for References

随時紹介する。

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
108	政治学演習 (佐藤正志)	通年	3年以上：4単位	佐藤 正志 政政・経演・国演

副題
Subtitle

公共性の思想史 - 近代啓蒙の批判的継承

授業概要
Course Description

本演習では西洋政治思想史上の古典的著作を、古典として現代になお生きつづけていることの意味を考えながら、またそれぞれのテキストの書かれた文脈をふまえながら、じっくりと読むことをひとつの目標としている。本年度も引き続き、いま、あらためて「啓蒙とは何か」を考えるという視点から、ルソーや百科全書派、またカントの古典に立ち戻る。同時に、啓蒙思想の歴史的コンテクストとして、書物や新聞の読者としての公衆の登場や世論の成立に着目しながら、市民社会と公共圏の形成について考察する。ハーバーマスやフーコーらの著作を読んで、私たちが現代の政治と公共性について考えるときに啓蒙思想はどのような意味をもっているのかを検討する。このようにして啓蒙の政治的ヴィジョンの多様性と現代性の再検討を目指す。

ゼミは毎回、共通テキストの分担報告を中心とする。本年度の主題に即して、古典を輪読すると同時に、それらのコンテクストに関する報告を分担して行う。夏期合宿では主題に関わる現代思想を取り上げる。こうした共通の取り組みと同時に、ゼミ参加者は、広く政治思想にかかわる領域から、それぞれ自分の問題関心にしたがってテーマを選び、研究をすすめることになる。春期と秋期にそれぞれ、その報告と討論の機会をもうける。なお専門演習では、こうした演習での成果を基礎に、ゼミ論文の作成にむけた指導と、中間報告が中心となる。各自の問題関心にしたがって研究を深めると同時に、できる限り、他のメンバーの取り組んでいる問題への関心を共有し、知識の幅を広げてゆけるようなゼミの持ち方を追求したいと思う。

授業の到達目標
Objectives

ゼミの課題に関連して自ら課題を設定し、レポートを作成すること。

授業計画
Course Schedule

第1回：ガイダンス
第2回：共通課題についての問題提起とディスカッション
第3回 - 第11回：共通課題についての分担報告とディスカッション
第12回 - 第14回：個別課題予備レポート報告
第15回：中間の理解度の確認
第16回 - 17回：共通課題についての分担報告とディスカッション
第18回 - 第23回：個別課題レポート中間報告
第24回 - 第29回：共通課題についての分担報告とディスカッション
第30回：総括、レポート提出

教科書
Textbook(s)

本演習では、初めに共通課題に関してディスカッションを行い、それを踏まえて主として古典的作品を共通テキストとして決定する。以下は本課題に関する古典の例。
ルソー『学問・芸術論』『人間不平等起源論』『社会契約論』、カント『啓蒙とは何か』など。

参考文献
Reference Book(s)

ロイ・ポーター『啓蒙主義』（岩波書店、2004年）。
トドロフ『啓蒙の精神』（法政大学出版局、2008年）。
ホーフ『啓蒙のヨーロッパ』（平凡社、1998年）。
ピーター・ゲイ『自由の科学 - ヨーロッパ啓蒙思想の社会』（ミネルヴァ書房、1982年）。
ヴェントゥーリ『啓蒙のユートピアと改革』（みすず書房、1981年）。
ダントントン『禁じられたベストセラー - 革命前のフランス人は何を読んでいたか』（新曜社、2005年）。
ホルクハイマー、アドルノ『啓蒙の弁証法』（岩波書店、1990年）。
ハーバーマス『公共性の構造転換』第2版（未来社、1994年）。
フーコー『啓蒙とは何か』（『フーコー・コレクション<6> 生政治・統治』（ちくま学芸文庫、2006年）。
佐藤正志編『啓蒙と政治』（早稲田大学出版部、2009年）。

その他、ゼミのなかで紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	課題設定、文献の活用、論理的構成。
平常点評価 Class Participation	50 %	分担課題についての発表と議論への積極的参加。
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/ssato/>

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
109	政治学演習 (高橋恭子)	通年	3年以上：4単位	高橋 恭子 政政・経演・国演

副題
Subtitle

映像ジャーナリズム研究 東日本大震災とメディア

授業概要
Course Description

東日本大震災から早7ヶ月。地方紙から中央紙、NHK・在京民放キー局からローカル局、コミュニティFMやネットメディアに至る多種多様のメディアが膨大な震災情報を提供している。マスメディアに対しては、東京発信の「被災地の視点」を欠いた報道、被災地の人々の不安や不信感を煽った報道等の批判がある一方で、阪神大震災の集中豪雨型報道の反省から、全国紙やテレビ局が地方の中小都市に記者を駐在させるなど被災地から情報を発信する大手メディアも見られる。本演習では、メディアが未曾有の大震災をどのように伝えたか、何が伝えられ、何が伝えられなかったのか、中央と被災地のメディアの伝え方の違いは何かを分析・調査し、震災報道のあり方を考察する。具体的には、1. 講義と討論「映像メディア検証」、2. 学生による震災報道分析、3. 被災地のローカルメディア取材・調査、4. 震災報道のあり方の検証、5. 取材・調査から成果物（文章、映像、写真、Web等）の制作、発表・評価から構成する。映像メディア分析では、メディア・リテラシー研究の分析手法を採用し、(1)メディア・テキスト、(2)オーディエンス、(3)テキストの生産・制作の3つの領域から考察する。取材・調査計画は夏休みのゼミ合宿で発表し、取材・調査は夏休み中に実施する予定である。

授業の到達目標
Objectives

メディアをクリティカルに分析する力とメディアを創造する実践的な力を養う。
実践はドキュメンタリー、フォトストーリー、Webコンテンツ、ソーシャルメディアを利用したコンテンツなど個々の知識と能力によって選択する。

授業計画
Course Schedule

第1回：映像メディア検証とメディア・リテラシー
第2回：4年生による「被災地のローカルメディア」の成果物発表
第3回：映像メディア検証
第4回：課題図書プレゼンテーション
第5－8回：メディア分析プレゼンテーション
第9回：映像メディア検証
第10回：課題図書プレゼンテーション
第11回：何を取材、調査するか。テーマの設定と企画
第12回：企画のブレインストーミング
第13－15回：被災地のメディア テーマ設定と企画、調査、取材
第16回：取材計画のプレゼンテーション
第17－20回：取材・調査中間発表
第21回：課題図書プレゼンテーション
第22回：取材した材料をどのようにまとめるのか/ 骨子と素案
第23回：取材から構成
第24－26回：震災報道のあり方の検証
第27－29回：成果物の発表
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

実際に放送されたテレビ番組、ドキュメンタリー映画、インターネット上の映像をテキストとして使用する。資料は毎回、コピーして配布する。

参考文献
Reference Book(s)

メディア・リテラシー教育 学びと現代文化、デビッド・バックingham 世界思想社
「メディア・リテラシーの現在と未来」鈴木みどり編著 世界思想社
「ドキュメンタリー映画の地平」佐藤 真
「マスコミュニケーション研究」デニス・マクウェル 慶応義塾大学出版会
「災害情報とメディア」平塚千尋 リベルタ出版
「震災とメディア」山中茂樹 世界思想社
「シビック・ジャーナリズムの挑戦」寺島英弥 日本評論社

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	25 %	メディア分析 メディアリテラシーの理解度。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席と授業の主体的参加度。
その他 Other	25 %	コンテンツのプランニングと実践力。

備考 Note	本演習にはコンテンツ制作のための技術指導が含まれません。映像制作のための技術を身につけたい場合は、オープン教育センター開講の「映像芸術表現」など映像系科目を受講するなどしてください。
------------	---

関連URL URLs for References	http://www.f.waseda.jp/kyt/
------------------------------	---

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
110	政治学演習 (田中愛治)	通年	3年以上：4単位	田中 愛治 政政・経演・国演

副題
Subtitle

現代政治学の実証分析・計量分析

授業概要
Course Description

現代政治現象の実証的な分析方法を実践的に学ぶ。日本および海外の投票行動・政治意識（世論）が担当教員の主な関心であるが、ゼミ生は政治過程全般に少しひろくテーマを設定しても良い。その中で、政治学的に意味のある仮説を立て、仮説の実証的な検証方法を学び、説得力をもった議論の展開の方法を身につけるように心がけたい。また、専門書や学術論文を読むことも、実証分析との関連で必要となるだろう。

3年生は秋の早稲田祭にグループごとに共同研究（グループワーク）の成果を発表するので、6月中旬から10月末までは、グループごとにその作業にとりかかる予定。

4年生は、各自が実証研究のテーマを設定して、卒論研究を行う。

夏休みは9月にゼミ合宿を行う予定。また年度の末に向けて、同志社大学と遠隔（テレビ会議方式）合同ゼミでプレゼンを互いに行う予定。

授業の到達目標
Objectives

ある政治又は経済現象の原因を探るため、仮説を立てて原因と考えられる要因が本当に原因と言えるのかを根拠を示して実証する能力を身につけることが目標である。そのために、SPSSを用いた実証的な統計分析により仮説を検証する能力を身につける。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：実証政治分析の考え方
- 第2回：実証分析の方法論を学ぶ：高根正昭『創造の方法学』（1）
- 第3回：実証分析の方法論（2）高根正昭『創造の方法学』3章
- 第4回：実証分析の方法論（3）高根正昭『創造の方法学』4章
- 第5回：実証分析の方法論（4）高根正昭『創造の方法学』5章 前半
- 第6回：実証分析の方法論（5）高根正昭『創造の方法学』5章 後半
- 第7回：実証分析の方法論（6）高根正昭『創造の方法学』6章 - 終章
- 第8回：計量分析の実習（1）パソコンによる統計分析 SPSS（1）
- 第9回：計量分析の実習（2）パソコンによる統計分析 SPSS（2）
- 第10回：計量分析の実習（3）パソコンによる統計分析 SPSS（3）
- 第11回：計量分析の実習（4）パソコンによる統計分析 SPSS（4）
- 第12回：グループワークのテーマ設定（1）
- 第13回：グループワークのテーマ設定（2） - グループ分け（テーマ別に）
- 第14回：グループワークによるデータ収集
- 第15回：テーマ別にグループ毎の夏休みの作業方針の決定
- 第16回：グループワークのグループ毎のデータ分析（1）
- 第17回：グループワークのグループ毎のデータ分析（2）
- 第18回：早稲田祭発表の準備・プレゼンテーション練習（1）
- 第19回：早稲田祭発表の準備・プレゼンテーション練習（2）
- 第20回：政経学部論文コンクールに向けて研究開始
- 第21回：政経学部論文コンクールに向けて分析（1）
- 第22回：政経学部論文コンクールに向けて分析（2）
- 第23回：政経学部論文コンクールに向けて執筆開始
- 第24回：政経学部論文コンクールに向けて完成
- 第25回：同志社大学との合同ゼミに向けてグループごとの分析とプレゼン（1）
- 第26回：同志社大学との合同ゼミに向けてグループごとの分析とプレゼン（2）
- 第27回：同志社大学との合同ゼミに向けてグループごとの分析とプレゼン（3）
- 第28回：各自卒論のテーマ設定とプレゼン（1） - 卒業後の進路検討（1）
- 第29回：各自卒論のテーマ設定とプレゼン（2） - 卒業後の進路検討（2）
- 第30回：各自卒論のテーマ設定とプレゼン（3） - 卒業後の進路検討（3）

教科書
Textbook(s)

伊藤光利、田中愛治、真淵 勝『政治過程論』有斐閣（2000年4月）
久米郁男、川出良枝、古城佳子、田中愛治、真淵 勝『政治学』有斐閣（2003年12月）
高根正昭『創造の方法学』講談社新書

参考文献
Reference Book(s)

ゼミの中で紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	30 %	出席。

備考
Note

学生に対する要望：
関連科目：「政治過程論」「計量政治学」は履修してもらいたい。ゼミへの出席は重視し、100%出席が原則と考えてもらいたい。

関連URL
URLs for References

授業初回または説明会（開催予定）の際に、お知らせします。

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
111	政治学演習 (田中孝彦)	通年	3年以上：4単位	田中 孝彦 政政・経演・国演

副題
Subtitle

世界政治秩序の歴史的変容と現在

授業概要
Course Description

このゼミでは、第二次世界大戦後の「冷戦」とよばれた時代から今日にかけて、世界政治がどのように変化してきたのかについて、分析を試みる。まず最初の学期では、アメリカの大学で評判の高い入門的な教科書を読み、国際政治の理論と歴史についての基礎知識と分析の方法を学ぶ。次に、冷戦時代の国際政治の歴史的展開について書かれた教科書と、重要な論点についての定評のある新しい研究論文と一緒に読み進めながら、冷戦時代の国際政治の変容過程について、理解を深める。最後に、冷戦の終焉から今日までの世界秩序のあり方についての論文を数本読むことを通じて、現在我々がどのような世界に生きており、今後どのような世界秩序が形成されるのかについて、考察を試みる。なお、夏と春に合宿を行い、現在の国際政治上の事象についての、定評のある論文を読みすすめる。また、各授業においては、できるかぎりアメリカやイギリス、そして日本の公開された機密文書の史料を読む。

授業の到達目標
Objectives

国際政治学について考察する際に必要不可欠で基本的な概念についての知識を、習得する。

理論的な分析方法と歴史的な分析方法の両方を用いて国際政治の現象を理解することができるようにする。

冷戦の時代から今日までの国際政治の変化を読み解くことで、現在の国際政治に対する主体的な判断ができるような人材となる。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：国際政治学の基礎（1）：現実主義とリベラリズム
- 第3回：国際政治学の基礎（2）：戦争はなぜ起こるのか
- 第4回：国際政治学の基礎（3）：第一次世界大戦の起源
- 第5回：国際政治学の基礎（4）：第二次世界大戦の起源
- 第6回：国際政治学の基礎（5）：冷戦とは何だったのか
- 第7回：国際政治学の基礎（6）：冷戦後の紛争
- 第8回：国際政治学の基礎（7）：グローバル化と相互依存の国際政治
- 第9回：国際政治学の基礎（8）：脱国家主体の台頭
- 第10回：国際政治学の基礎（9）：冷戦後国際秩序
- 第11回：冷戦期国際政治史（1）：なぜ冷戦を学ぶのか
- 第12回：冷戦期国際政治史（2）：冷戦史研究の視点
- 第13回：冷戦期国際政治史（3）：冷戦開始の前提条件 1
- 第14回：冷戦期国際政治史（4）：冷戦開始の前提条件 2
- 第15回：冷戦期国際政治史（5）：冷戦の起源（欧州）1
- 第16回：冷戦期国際政治史（6）：冷戦の起源（欧州）2
- 第17回：冷戦期国際政治史（7）：冷戦期におけるアジア国際政治 1
- 第18回：冷戦期国際政治史（8）：冷戦期におけるアジア国際政治 2
- 第19回：冷戦期国際政治史（9）：冷戦の変容と拡大 1
- 第20回：冷戦期国際政治史（10）：冷戦の変容と拡大 2
- 第21回：冷戦期国際政治史（11）：人類滅亡の危機から緊張緩和へ 1
- 第22回：冷戦期国際政治史（12）：人類滅亡の危機から緊張緩和へ 2
- 第23回：冷戦期国際政治史（13）：冷戦と社会変動 1
- 第24回：冷戦期国際政治史（14）：冷戦と社会変動 2
- 第25回：冷戦期国際政治史（15）：冷戦と社会変動 3
- 第26回：冷戦期国際政治史（16）：緊張緩和の進展と挫折 1
- 第27回：冷戦期国際政治史（17）：緊張緩和の進展と挫折 2
- 第28回：冷戦期国際政治史（18）：冷戦の終焉 1
- 第29回：冷戦期国際政治史（19）：冷戦の終焉 2
- 第30回：冷戦期国際政治史（20）：冷戦の終焉 3

教科書
Textbook(s)

- 1 . Joseph S. Nye, Jr. and David A. Welch, Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History, Peason, 2010.
- 2 . Robert J. McMahon, The Cold War: A Very Short Introduction, OUP, 2003.
- 3 . Jussi Hanhimaki & Odd Arne Westad, The Cold War: A History in Documents and Eyewitness Accounts, OUP, 2003.
- 4 . G. John Ikenberry, After Victory: Institutions, Strategic Restraint, and the Rebuilding of Order after Major Wars, Princeton UP, 2001.
- 5 . Stanley Hoffmann, Chaos and Violence: What Globalization, Failed States, and Terrorism Mean for U.S. Foreign Policy, Brown & Littlefield, 2006.

参考文献
Reference Book(s)

授業中に適宜紹介する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	試験は行わない。
レポート Report(s)	20 %	年に数回提出を要求する。全提出が前提。
平常点評価 Class Participation	80 %	担当の報告の内容と、授業中の討議でのパフォーマンスの質と量から判断する。
その他 Other	%	

備考
Note

- 1 . 上記の授業計画に加えて、夏合宿を行い、時事的な問題についての論文などを読み議論します。スポーツもやります。就活などによって困難ではありますが、春または冬合宿も計画しています。授業の補完をし、スキーもやります。
- 2 . 前向きで熱意のある人、チャレンジ精神旺盛な人、来たれ。
- 3 . なお、英語の文献をたくさん読みますが、はじめの半年をクリアすれば、すぐに慣れます。1時間に10ページは読めるようになります。ひるまずにチャレンジしてください。

関連URL
URLs for References

授業初回または説明会（開催予定）の際に、お知らせします。

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
112	政治学演習 (谷藤悦史)	通年	3年以上：4単位	谷藤 悦史 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

世論・メディア政治・政治コミュニケーション研究

授業概要
Course Description

マス・メディアの発達と社会への浸透さらにまた新しいメディアの誕生は、政治のあり方を変えつつあります。本演習は、社会の情報化による政治的影響を様々な角度から探ることをねらいとして研究を進めます。

具体的には、情報テクノロジーの発達と政治過程の変容、政治態度、政治意見、政治的価値観、政治イメージ形成とマス・メディアの関係、選挙キャンペーン、投票行動とマス・メディアの諸影響、現代テレビ政治の特質、政治ジャーナリズムの現代的特性、現代世論の特性などの問題を、最新の理論成果を基に研究します。

研究は、理論と分析方法の検討、データの収集と解析、比較研究の視座からの欧米各国と我が国の状況との比較検討、などを行う形で進めます。マス・メディアと政治、世論などに関心を持ち、積極性のある学生を求めます。

授業の
到達目標
Objectives

高い分析能力と論理的な思考能力の獲得。
ゼミナール論文の完成(40,000字程度)。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：春学期演習のガイダンス
- 第2回：政治とメディアをどう研究するか
- 第3回：現代ニュースの特性
- 第4回：現代ニュースの生産過程
- 第5回：現代のジャーナリズムとジャーナリスト
- 第6回：現代のPRと政治
- 第7回：現代のオーディエンス
- 第8回：現代の選挙とメディアを理解する
- 第9回：現代政党のメディア利用を理解する
- 第10回：現代紛争とメディア
- 第11回：現代のテロとメディア
- 第12回：ニューメディアと政治的利用
- 第13回：ニューメディアは民主主義を変えるか
- 第14回：政治とメディア研究の方法
- 第15回：春学期理解度の確認
- 第16回：秋学期演習のガイダンス
- 第17回：世論概念を検討しよう(1)
- 第18回：世論概念を検討しよう(2)
- 第19回：世論の歴史(1)
- 第20回：世論の歴史(2)
- 第21回：世論の歴史(3)
- 第22回：世論をどうとらえるか
- 第23回：現代の世論調査
- 第24回：社会学的世論研究
- 第25回：心理学的世論研究
- 第26回：認知心理学と世論研究
- 第27回：世論の経済学的方法
- 第28回：世論と現代民主主義(1)
- 第29回：世論と現代民主主義(2)
- 第30回：秋学期理解度の確認

教科書
Textbook(s)

授業でそのつど指示します。

参考文献
Reference Book(s)

M. L. デフレー、S. ポール＝ロキーチ 柳井・谷藤訳 『マスコミュニケーションの理論』 敬文堂
谷藤・大石訳 『リーディングス政治コミュニケーション』 一芸社
谷藤 『現代メディアと政治』 一芸社
谷藤 『政治コミュニケーションを理解する52章』 早稲田大学出版部

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	年次における数回のレポート。
平常点評価 Class Participation	50 %	ゼミにおける発表・報告。
その他 Other	%	

備考
Note

関連科目：政治学、現代デモクラシー論、政治過程論、マス・コミュニケーション論、社会調査論などを取得するのが望ましい。
学生に対する要望：この分野に興味を持ち、主体的、積極的に研究する意欲ある学生諸君の参加を求めます。志望の際は研究のねらいと目標などを詳しく書くこと。連続してゼミに参加しない学生は評価しない。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
113	政治学演習 (土屋礼子)	通年	3年以上：4単位	土屋 礼子 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

近代史におけるメディアとプロパガンダ、およびジャーナリズム

授業概要
Course Description

近代日本および欧米におけるメディアの発達の経緯を理解し、検閲制度をはじめとする政府との関係、政治家とジャーナリズムの関係、世論を動かすためのプロパガンダという思想がどのように展開してきたかを、実証的に学び議論する。また、実際にメディアやジャーナリズムに関係した人々にインタビュー調査や資料探索を行ない、メディアの歴史や、メディアに対するアプローチのしかた、メディアの分析のしかたに関する知見を深め、年度末には各自が卒論テーマを見いだせるよう研究をすすめる。

授業の
到達目標
Objectives

メディアとジャーナリズムに関する基本的知識を学ぶだけでなく、それを活用し、自分で資料を探索し読み解き、思考する能力を養う。また実際にインタビュー調査を行う力量を育成する。

授業計画
Course Schedule

第1回：全体的な導入
第2回：基本文献（日本語）の輪読（1）
第3回：基本文献の輪読（2）
第4回：基本文献の輪読（3）
第5回：基本文献の輪読（4）
第6回：基本文献の輪読（5）
第7回：基本文献の輪読（6）
第8回：中間のまとめと議論
第9回：基本文献（英語）の輪読（1）
第10回：基本文献の輪読（2）
第11回：基本文献の輪読（3）
第12回：基本文献の輪読（4）
第13回：基本文献の輪読（5）
第14回：基本文献の輪読（6）
第15回：前半のまとめと議論
第16回：各メディア及び人物の研究に関する導入
第17回：各メディア研究報告（1）
第18回：各メディア研究報告（2）
第19回：各メディア研究報告（3）
第20回：各メディア研究報告（4）
第21回：各メディア研究報告（5）
第22回：各メディア研究報告（6）
第23回：中間のまとめと議論
第24回：人物研究報告（1）
第25回：人物研究報告（2）
第26回：人物研究報告（3）
第27回：人物研究報告（4）
第28回：人物研究報告（5）
第29回：人物研究報告（6）
第30回：後半のまとめと議論

教科書
Textbook(s)

最初に、ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』（未来社、第二版）を読む。以降は授業中に指示する。

参考文献
Reference Book(s)

参考書：土屋礼子共訳『米国のメディアと戦時検閲』（法政大学出版社）

『近代日本メディア人物誌』（ミネルヴァ書房）など。
他は随時紹介する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備考
Note

メディア史に関心のある方で、積極的に議論する方を望みます。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
114	政治学演習 (坪井善明)	通年	3年以上：4単位	坪井 善明 政政・経演・国演

副題
Subtitle

東南アジアの政治と社会

授業概要
Course Description

ASEAN10カ国だけでなく、インド、中国、台湾、韓国を含む東南アジア、東アジアに関心を持つ諸君の参加を求めます。三年生の前半は、これらの地域の現状を分析するための社会的な基礎文献の購読を中心にゼミは展開されます。

アンダーソン、サイード、センなどの外国人研究者の文献だけでなく、中西徹、末廣昭、白石隆などの日本人研究者の文献も涉猟します。3年秋学期からは、グループに分かれて、担当の地域や国を決めて、各地域や各国の歴史・地理・政治・経済・文化などを包括的にかつ深く勉強して、自分の卒論のテーマを探します。4年生になってからは、自分の卒論のテーマを決め、それを書くための資料収集や現地調査をしてもらい、卒論完成に向けて中間発表や宿舎などを行います。4年生の最後には研修旅行として、ヴェトナムに行き、ハノイ大学・ホーチミン市大学との学生との討論会を予定しています。

授業の
到達目標
Objectives

政治学を中心とした社会科学の古典・名著・刺激的な本等を「読み・書き・考える」ことを通して、更に東南アジア・東アジア一國を深く研究することを通じて、生涯にわたって「総合的な知識人」に自分を知的に鍛え上げていく方法を学びます。そして、大学を出て社会人になっても「真理の前の学び人」として一生自ら勉強に励む習慣を身につけることが出来る方法と基礎知識を習得することを目標とします。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：授業方法の紹介、自己紹介
 第2回：課題書1。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第3回：課題書2。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第4回：課題書3。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第5回：課題書4。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第6回：課題書5。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第7回：課題書6。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第8回：課題書7。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第9回：課題書8。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第10回：課題書9。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第11回：課題書10。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第12回：課題書11。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第13回：課題書12。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第14回：課題書13。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第15回：課題書14。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第16回：課題書15。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第17回：課題書16。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第18回：課題書17。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第19回：課題書18。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第20回：課題書19。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第21回：課題書20。(各自2000字にレポートを書いてきて報告)
 第22回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告1
 第23回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告2
 第24回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告3
 第25回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告4
 第26回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告5
 第27回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告6
 第28回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告7
 第29回：東南アジア諸国の政治経済研究グループ報告8
 第30回：総括と卒論の課題

教科書
Textbook(s)

授業中に指示する。

参考文献
Reference Book(s)

坪井善明『ヴェトナム「豊かさ」への夜明け』、『ヴェトナム新時代 - 「豊かさ」への模索』（岩波新書）を事前に読了しておくこと。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	20 %	
その他 Other	30 %	4年次の卒業論文、3年次は毎回のレポートと平常点の合計で評価。

備考
Note

課題書は参加学生と協議して決定する。ゼミへの出席は重視し、100%出席が原則と考えてもらいたい。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
115	政治学演習 (仲内英三)	通年	3年以上：4単位	仲内 英三 政政・経演・国演

副題
Subtitle 近代西欧政治社会の歴史

授業概要
Course Description 本年度は、19世紀後半から20世紀中葉にかけての英国とドイツの政治について、とくに政党の活動を中心に検討していきたい。同じくヨーロッパに属する英国とドイツではあるが、両地域における政党の発展は、歴史的・社会的・思想的なさまざまな要因から異なる発展を遂げてきた。それは当時の両地域の政治社会の違いを知るうえで重要であるばかりでなく、現在のヨーロッパの政治を考えるうえでも非常に示唆に富むものである。

授業の到達目標
Objectives 近現代のヨーロッパの政治について理解できるようになる。

授業計画
Course Schedule

第1回：政党とその役割
 第2回 - 第16回：英国の政党の発展
 第2回：政党研究の歴史と政党の類型
 第3回 - 第4回：1867年から1895年までの自由党優位の時代
 第5回 - 第6回：1874年から1900年までの保守党の復活
 第7回 - 第8回：19世紀後半（後期ヴィクトリア時代）の政治変革
 第9回 - 第10回：19世紀末から第一次大戦までの政党の危機
 第11回：世紀転換期の新自由主義の形成
 第12回：世紀転換期の労働主義と労働党の誕生
 第13回 - 第14回：1906年から1914年までの政党政治（選挙選を中心に）
 第15回 - 第16回：両大戦間期の政党と議会
 第17回 - 第30回：ドイツの政党の発展
 第17回 - 第20回：19世紀中葉からドイツ帝国創建までの政党
 (1) 自由主義諸政党 (2) 保守主義諸政党
 (3) 政治的カトリシズム (4) 社会主義諸政党
 第21回 - 第24回：ドイツ帝国時代の政党
 (1) 自由主義諸政党 (2) 保守主義諸政党
 (3) 中央党 (4) 社会民主党
 第25回 - 第30回：ヴァイマル共和国時代の政党
 (1) ドイツ民主党、ドイツ人民党 (2) 社会民主党
 (3) 中央党 (4) ドイツ国民人民党
 (5) ドイツ国民社会主義労働党 (6) ドイツ共産党

教科書
Textbook(s) なし。教師が授業内容に即したレジユメを配布する。

参考文献
Reference Book(s) 授業のはじめに、参考文献の一覧表を配布する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
116	政治学演習 (中村英俊)	通年	3年以上：4単位	中村 英俊 政政・経演・国演

副題
Subtitle

国際政治の理論と現実 - 英国学派を中心に

授業概要
Course Description

EU・ヨーロッパ統合、アジアの地域統合、国際連合、G8 / G20サミット、核拡散問題、エネルギー問題、気候変動問題など国際関係・国際政治の事例について、その本質（「現実」）を研究（理解・説明・分析）する上で、私たちは一定の理論的枠組みを必要とする。国際政治の理論研究は、第二次世界戦争後、アメリカの学界を舞台に発展してきたと言える。そこでは、リアリズムとリベラリズムの間のパラダイム論争が重要な位置を占めてきた。しかし、大西洋の反対側・英国の国際政治学界では、アメリカの学問的流行とは一線を画した、独特な理論研究が積み重ねられてきた。「英国学派」（English School）と呼ばれる国際政治の見方を身に付けることが、本演習の基本的目標である。

本演習では、まず第1段階として、邦語・邦訳文献を中心にした輪読を通して、主としてアメリカ国際政治学界で展開してきたリアリズムとリベラリズムの論争について概観したい。この段階では、下記の参考文献（1）（2）などを読み込むことになる。つぎの第2段階では、「英国学派」の国際政治理論について、参考文献（3）（4）などで基礎知識を身に付けた後、より専門的な英語文献に取り組みたい。具体的には、英国国際政治学会（BISA）のReview of International Studies誌、および、英王立国際問題研究所（RIIA）のInternational Affairs誌などから各自が関心を寄せるテーマの論文を選び、報告・輪読の作業を重ねる。この段階で、各自が研究テーマを絞り込む作業を始めることになる。最後に第3段階では、それまでの理論研究の成果を踏まえて、各自が事例研究のテーマを決定する。そして最終的に、理論研究と事例研究が上手く融合するゼミナール論文を完成してもらう。

授業の到達目標
Objectives

本演習の3年（政治学演習）春学期には参考文献（2）の英語原著を輪読し、夏季休業中に各自の研究テーマを考え始め、秋学期には各自のテーマに即した先行研究（学術誌の英語論文）を輪読する。3年終了時点では、タームペーパーを提出してもらう。

4年（政治学演習）への過渡期（2 - 3月）に、同タームペーパーに基づく報告会を開催し、ゼミナール論文完成へ向けての課題を自覚してもらうことになるだろう。4年春学期には、ゼミナール論文の中間報告を重ね、特に夏季休業中には（3年生も前にして）全員参加の報告会を開催する。4年秋学期で完成させるゼミナール論文については、春季休業中に口頭試験ないしは最終報告会を開催することにする。

授業計画
Course Schedule

< 政治学演習（3年）>

第1回：オリエンテーション

第2回：国際政治の研究テーマ

第3回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 1）

第4回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 2）

第5回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 3）

第6回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 4）

第7回：先行研究の調査実習

第8回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 5）

第9回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 6）

第10回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 7）

第11回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 8）

第12回：英語基礎文献輪読（Nye and Welch, Chap. 9）

第13回：国際政治の理論と現実：各自の研究テーマの選定

第14回：各自の研究テーマに関する先行研究の検討

第15回：報告会：各自の暫定的研究テーマについて

第16回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（1）（2）

第17回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（3）（4）

第18回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（5）（6）

第19回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（7）（8）

第20回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（9）（10）

第21回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（11）（12）

第22回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（13）（14）

第23回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（15）（16）
 第24回：研究テーマ報告：英語文献（先行研究）の紹介を中心に（17）（18）
 第25回 - 第30回：タームペーパー中間報告
 <政治学演習（4年）>
 第1回 - 第20回：ゼミナール論文中間報告
 第21回 - 第30回：ゼミナール論文報告

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s)

- (1) 鴨 武彦ほか編『リーディングス・国際政治経済システム』（全4巻、有斐閣）特に、第1巻『主権国家を超えて』と第4巻『新しい世界システム』
 (2) ジョセフ・S・ナイ『国際紛争：理論と歴史』（田中明彦・村田晃嗣訳、有斐閣）
 *英語原著最新版：Joseph S. Nye and David A. Welch, Understanding Global Conflict and Cooperation: An Introduction to Theory and History (8th Edition)
 (3) ヘドリー・ブル『国際社会論：アナキカル・ソサイエティ』（白杵英一訳、岩波書店）
 (4) Robert Jackson and Georg Sorensen, Introduction to International Relations

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	40 %	タームペーパー / ゼミナール論文の内容と口頭報告。
レポート Report(s)	30 %	レジュメに基づく報告（春学期・夏季・秋学期各1回以上）。
平常点評価 Class Participation	30 %	出席およびディスカッションへの積極的な参加姿勢（毎回、最低1回は発言してもらう）。
その他 Other	%	

備考
Note

関連科目：国際機構論、現代国際関係論、国際政治学、国際政治史、国際法など。オープン教育センターの「テーマスタディ（全学共通副専攻）」の中では、「EU・欧州統合研究」、「国際協力」など。
 学生に対する要望： 厳しく楽しいゼミを創りたいと思います。積極的かつ主体的に参加してくれる人の応募を待っています。
 留意事項：毎週木曜5時限のゼミは時間を延長して（6時限も）ジックリと議論を深めます。夏季休業中のゼミ合宿（予定）へも参加してください。なお、2012年度春学期は、特別研究期間のため、土曜日などに集中講義形式で「補講」を実施することがあります。

関連URL
URLs for References

http://taiken-waseda.jp/gakumon/zemi_nakamura_hidetoshi.html

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
117	政治学演習 (日野愛郎)	通年	3年以上：4単位	日野 愛郎 政政・経演・国演

副題
Subtitle

メディアと選挙の実証分析

授業概要
Course Description

このゼミでは、メディアと選挙の実証分析について学びます。「選挙」という政治的な大イベントでは、政治家や政党はマニフェストという形で政策集を発表し、マス・メディアも、これらの政策メッセージや党首の発言などを報道します。そして、有権者は様々な政治的なメッセージを受け取ることになります。このゼミでは、3年次に内容分析 (content analysis) や世論調査分析 (survey analysis) の手法を学びながら、政治的情報を体系的に記録し、分析します。3年次の1年間で、実証分析の基礎であるデータ構築の方法・テクニックを身に付けてもらいます。4年次では、自らの関心に沿って卒業論文を作成してもらいます。テーマはメディアと選挙に関連することであれば何でも構いません。3年次に作成したデータを利用して論文を作成することも歓迎します。最終的に、自らの関心に沿って、仮説を検証することが目的となります。ゼミ全般を通して、他大学で実証分析を行っているゼミと連携して、合同ゼミを開催することも予定しています。

授業の到達目標
Objectives

疑問に思うことを学術的な問いの形で表現する力 (リサーチクエスチョンを立てる力)、「これは!」と思う答えを探し出す力 (仮説を立てる力)、立てた仮説が正しいかを確認する力 (仮説を検証する力) を養います。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：実証分析とは
- 第2回：リサーチクエスチョンを探す
- 第3回：仮説を立てる
- 第4回：作業化する
- 第5回：因果関係を特定する
- 第6回：ケースを選択する
- 第7回：資料を収集する
- 第8回：データを構築する
- 第9回：内容分析の方法(1)：分析の単位
- 第10回：内容分析の方法(2)：サンプリングとコーディング
- 第11回：世論調査分析の方法(1)：調査票の作成
- 第12回：世論調査分析の方法(2)：データベースの構築
- 第13回：実証研究の例(1)：比較マニフェスト研究
- 第14回：実証研究の例(2)：情勢報道研究
- 第15回：春学期の理解度の確認
- 第16回：ゼミ生による資料収集・報告(1)
- 第17回：ゼミ生による資料収集・報告(2)
- 第18回：ゼミ生による資料収集・報告(3)
- 第19回：データの構築(1)
- 第20回：データの構築(2)
- 第21回：データの構築(3)
- 第22回：データの構築(4)
- 第23回：データの構築(5)
- 第24回：ゼミ生による内容分析・報告(1)
- 第25回：ゼミ生による内容分析・報告(2)
- 第26回：ゼミ生による内容分析・報告(3)
- 第27回：ゼミ生による内容分析・報告(4)
- 第28回：ゼミ生による内容分析・報告(5)
- 第29回：仮説の検証とは
- 第30回：秋学期の理解度の確認

教科書
Textbook(s)

高根正昭『創造の方法学』講談社現代新書、1979年。
クラウド・クリッペンドルフ『メッセージ分析の技法 - 「内容分析」への招待』勁草書房、

1989年。
有馬明恵 『内容分析の方法』ナカニシヤ出版、2007年。

参考文献
Reference Book(s)

ゼミにおいて適宜指示します。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	70 %	ゼミにおける討論、報告、運営等の貢献度を総合的に評価します
その他 Other	30 %	3年次のグループワークの成果を評価対象とします

備考
Note

マスコミュニケーション理論、政治過程論、計量政治学、ジャーナリズム分析入門などの関連科目を履修していることが望まれます。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
119	政治学演習 (藤井浩司)	通年	3年以上：4単位	藤井 浩司 政政・経演・国演

副題
Subtitle

比較公共政策への接近

授業概要
Course Description

世紀の転換のただなかであって、20世紀後半期を通じて先進社会が共有してきた戦後コンセンサスの終焉が告げられている。21世紀になってさらに顕著になったこの揺らぎは、既成の体制として構築された社会・経済・政治構造の抜本的な組み替えを迫っている。Restructuring, realignmentなどといったフレーズで示される構造改革の課題は、特に政府／公共部門にとって「存立の危機」にかかわるほどにまで重くのしかかり、厳しく問い直されている。「モデルなき実験」、「羅針盤なき航海」ともいわれる課題への取り組みは、各国によってさまざまであり、再編の道程も定まっていない。自らの座標を定め、課題解決のためのオルタナティブを探るうえで、各国の政策対応を整理・分析する意義はこれまで以上に大きいといえる。こうした問題関心から、各国における個別政策分野での政策対応の現状・課題・展望について検討していきたい。

授業の到達目標
Objectives

各自の研究課題に関する論文作成。
議題に関する質疑応答。講評力の涵養。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第30回：受講生研究報告＋質疑応答、講評・総括

教科書
Textbook(s)

別途随時指示する。

参考文献
Reference Book(s)

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	レジュメ内容、ターム・ペーパー、卒論。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席状況、参加意欲、授業運営への貢献。
その他 Other	20 %	ゼミ合宿などへのプロジェクトへの参加。

備考
Note

ゼミナールは、3・4年合同で2時限連続で行います。フルタイム参加するのがゼミ加入の前提条件です。また、合宿(夏)、コンパ(随時)など課外活動への参加は、ゼミ参加の基本的な条件です。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
120	政治学演習 (眞柄秀子)	通年	3年以上：4単位	眞柄 秀子 政政・経演・国演

副題
Subtitle

世界各国の比較政治分析

授業概要
Course Description

比較政治学の代表的な理論枠組みや分析手法を駆使して、現代政治世界のさまざまな「なぜ？」の解明に取り組む。検討テーマになりうるものは多岐にわたる。例えば、世界各国で、民主的アカウンタビリティがうまく機能しなくなるのは、どのような環境のもとにおいてなのか。欧州の債務危機は各国政治にどのような影響を及ぼしているのか。フランス、イタリア、ドイツなどの欧州各国の近年の選挙における保守回帰（フランス、イタリア、ドイツ等）はなぜ起こっているのか。各国福祉改革や経済構造改革における政府の役割重視と市場機能重視の度合いの国ごとの違いはなぜ起こるのか。豊かな非民主的体制はなぜ民主化が難しいのか。世界各国で、政治腐敗が起こりやすい国と起こりにくい国があるのはなぜか・・・これらに代表される多様な謎を比較政治学的アプローチで検討する。

アプローチのとり方は自由。社会学的、歴史的、経済学的アプローチのどれを使ってもよい。ややヨーロッパにアクセントが置かれるが、分析対象は、先進諸国、アジア、アフリカ、ラテンアメリカのいずれの地域・国でもよい。各自がそれぞれの分析対象国に関する緻密な研究を行うと同時に、他のゼミ生の研究発表を通じて世界中の政治の現在を知り、さまざまな問題の解決の道を模索する。

またゼミでは、できる限り海外ゲストに講演していただく機会を作りたい。2010年度にはニューヨーク大学のA. プシェヴォスキ教授、ミラノ大学のA. マルティネッリ教授、S. サッキ教授を招聘し、政策刷新やパラダイム転換の可能性についてご講義いただいた。また2011年度はフランスからR. ボワイエ教授をお招きし、世界金融危機と政治についてお話いただく予定である。2012年度も、内外のゲストを招聘し、ゼミ生に活発に参加してもらいたい。ゼミでは、英語だけでなく、それ以外の外国語にも力を入れて勉強することを奨励したい。

授業の到達目標
Objectives

世界各国の政治の実態を把握し、比較政治学の理論や分析枠組みを用いてそれを分析することを通じて政治世界の今日的な諸課題に対して、政治学がどのように貢献できるのかを問いたい。

授業計画
Course Schedule

第1回：イントロダクション（自己紹介とスケジュール調整等）

第2回－第12回：文献の講読と討論

下のリストを参考に必要に応じてより新しい文献も加えて、重要な理論枠組みを検討する。

(1) R. ホーリングスワース、長尾伸一、長岡延孝『制度の政治経済学』木鐸社、2000。

(2) B. アマーブル著 山田鋭夫、原田祐治訳『五つの資本主義：グローバリズム時代における社会経済システムの多様性』藤原書店、2005。

(3) P. ホール、D. ソスキス著 遠山弘徳訳『資本主義の多様性：比較優位の制度的基礎』ナカニシヤ出版、2007。

第13回－第15回：各自の研究予定課題発表と討論

なお、夏休み期間にはゼミ合宿を予定している。

第16回－第29回：各国エネルギー政策・経済政策などテーマを設定し、国ごとのチームを作り、数週間にわたってグループ発表を行う。その後は各自の研究報告と討論。下記の文献を必要に応じて講読する。

(1) 日本比較政治学会編『比較政治学の将来』早稲田大学出版部、2006。

(2) 宮本太郎編『比較福祉政治：制度転換のアクターと戦略』早稲田大学出版部、2006。

(3) ツェベリス『拒否権プレイヤー：政治制度はいかに作動するか』早稲田大学出版部、2009。

(4) 眞柄秀子、井戸正伸編『拒否権プレイヤーと政策転換』早稲田大学出版部、2007。

(5) 眞柄秀子編『デモクラシーとアカウンタビリティ：グローバル化する政治責任』（風行社、近刊）

第30回：まとめ、研究プロポーザル提出

教科書
Textbook(s)

特になし。

参考文献
Reference Book(s)

眞柄・井戸『改訂版 比較政治学』放送大学教育振興会（2004年）。
新川・井戸・宮本・眞柄『比較政治経済学』有斐閣（2004年）。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備考
Note

比較政治学の主要理論を学び、仮説を立て、それを実証するというスタイルで勉強したい人向き。特定のテーマや地域・国に関心を持ち、その最新の展開をフォローするよう心がけてほしい。本格的に研究したい人が多くを学べるゼミにしたい。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
121	政治学演習 (谷澤正嗣)	通年	3年以上：4単位	谷澤 正嗣 政政・経演・国演

副題
Subtitle 現代リベラリズムとその批判

授業概要
Course Description 政治を語る際に用いられる重要な概念について分析しつつ、「権力とはどんな力か」「自由と平等を両立させる政治体制は可能か」「正義と不正義を判断する原理は何か」といった問題を扱うのが政治理論である。政治理論の研究は古典古代にさかのぼる歴史的次元と、きわめて抽象的な哲学的次元を有するが、現代の研究の多くは「リベラル・デモクラシー」と呼ばれる特定の具体的な体制をなせば自明の前提としている。リベラル・デモクラシーに含まれる価値や規範を肯定し正当化する志向を強くもつ政治理論を「現代リベラリズム」と呼ぼう。他方、それらの価値や規範に対する批判に重きをおく政治理論を「現代リベラリズム批判」と呼ぼう。本演習では、現代リベラリズムとそれを批判するさまざまな潮流のあいだの対話を追いながら、現代リベラリズムがどのように洗練されてきたかを明らかにする。

授業の到達目標
Objectives (1) 現代政治理論の主要な論点、とくに現代リベラリズムとその批判について理解する。
(2) 哲学的な読解、思考、表現、討論の技法を学ぶ。
(3) 次年度に政治学演習を受講し、演習論文を執筆するための能力を涵養する。

授業計画
Course Schedule 第1回：イントロダクション 現代政治理論とは何か
第2回：リベラリズムとは何か(1)
第3回：20世紀のリベラリズム(2)
第4回 - 第15回：『正義論』講読
第16回：考察と討議(2) 夏季レポート報告
第17回 - 第29回：文献講読(使用する文献は授業開始後に決定する)
第30回：考察と討議(3) ゼミ論文執筆に向けて

教科書
Textbook(s) 春学期は川本隆史ほか訳『正義論』(紀伊国屋書店、2010年)を使用する。秋学期の教科書は授業開始後に受講生と相談の上で決定する。

参考文献
Reference Book(s) 川崎 修、杉田 敦編『現代政治理論』(有斐閣、2006年)
太田義器、谷澤正嗣編『悪と正義の政治理論』(ナカニシヤ出版、2007年)
戸田山和久『論文の教室』(日本放送出版協会、2002年)
ウィル・キムリッカ(千葉、岡崎訳者代表)『新版 現代政治理論』(日本経済評論社、2005年)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	少なくとも2度のレポート提出を必須課題とする。問題設定の適切さと、レポート全体を構成する能力を重視する。
平常点評価 Class Participation	50 %	レジュメによる報告、討論への積極的で協力的な参加、討論から明らかになる文献の理解度などを総合的に評価する。
その他 Other	%	

備考
Note 選考課題(レポート)を課す。課題の詳細は掲示を参照のこと。教員オリエンテーションで参考資料を配布するので必ず入手して熟読すべし。ゼミの見学は随時歓迎する。質問や相談は電子メールでどうぞ。

關連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
122	政治学演習 (山本武彦)	通年	3年以上：4単位	山本 武彦 政政・経演・国演

副題
Subtitle

安全保障と国際政治

授業概要
Course Description

本演習では、国家安全保障、国際安全保障、脱国境安全保障（「人間の安全保障」を含む）の三つの安全保障の次元をめぐって書かれた英語文献の分析と検討、討論を通して国際政治の核心を構成してきた安全保障問題の本質を理解することに努める。具体的には安全保障関連の英語論文を“International Security”誌などの文献から引き出してグループごとに検討し、さらに全体討論で徹底的に掘り下げた討論を行うことによって、問題の所在を的確に把握することに努める。この研究は、各自の問題意識にそって卒業論文作成の前段階の試みであり、随時受講生による中間報告の機会も設けたい。評価は、受講者の担当した英語文献に基づく問題関心を問うレポートの内容と出席成績、討論への寄与度を総合して最終判定を行う。なお、1年に1回（2011年度は時期未定）に合宿を行い、問題意識のさらなる高揚に努める。演習希望者は当該合宿への参加が義務づけられるので、注意のこと。また、本演習では1997年以降、韓国の延世大学政治外交学科と交流プログラム（Wase Yon Program）を年2回実施しており、国際交流を通じた国際政治の理解の促進に努めていることを附記しておく。また、立命館大学政策科学部国際関係論ゼミとも合宿形式の討論会を行っている。

授業の到達目標
Objectives

高度な水準の英語論文を読むことで、安全保障の理論と実際を的確に把握できる能力を身につける。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第7回：“International Security”誌の中から1論文を選び、輪読開始（第1班）
第8回 - 第14回：“International Security”誌の中から他の1論文を選び、輪読開始（第2班）
第15回 - 第21回：“International Security”誌の中から他の1論文を選び、輪読開始（第3班）
第22回 - 第28回：“International Security”誌の中から他の1論文を選び、輪読開始（第4班）
第29回 - 第30回：4回にわたる輪読を踏まえて安全保障の現代的課題を討論

教科書
Textbook(s)

ハーヴァード大学ケネディ・スクール、Belfer Center for Science and International Affairs編集、“International Security”誌所収の論文

参考文献
Reference Book(s)

山本武彦編『国際安全保障の新展開』早稲田大学出版部
同 編『国際関係論のニューフロンティア』成文堂
同 編『冷戦後のアジアの安全保障』日本学術振興協会
同 著『安全保障政策』日本経済評論社
同 著『国際関係の理論と実際』ヌース出版
メアリー・カルドー著、山本武彦・渡部正樹訳『新戦争論』岩波書店
メアリー・カルドー著、山本武彦他訳『グローバル市民社会論』法政大学出版局
メアリー・カルドー著、山本武彦他訳『「人間の安全保障」論』法政大学出版局

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	担当論文に対する理解と批判精神。
平常点評価 Class Participation	40 %	討論参加の積極度。
その他 Other	10 %	出席点。

備考
Note

英語文献の読解能力の高さと積極・果敢な討論への参加の意欲が求められる。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
123	政治学演習 (吉野孝)	通年	3年以上：4単位	吉野 孝 政政・経演・国演

副題
Subtitle 現代デモクラシーの政治過程

授業概要
Course Description 現代デモクラシーは、多くの観点から見直しを迫られている。日本では「55年体制」の崩壊以降、新しい政党政治の在り方が模索され、従来の政府・行政の在り方が再検討されている（行政改革・地方分権）。実際、民主党政権の誕生によりその動きは本格化したものの、これまでのところ政権交代の効果は期待を下まわっている。また、新しい政策課題の出現とともに、住民投票やNPOなど新しい参加様式へ関心も高まっている。本演習の課題は、現代デモクラシーの政治過程についての理論と実際の研究をつうじて、現代デモクラシーの問題状況を把握しその解決策を展望することにある。

授業の到達目標
Objectives 疑問を研究テーマに変換し、それを論理的・段階的に思考し、そのプロセスを長い文章で表現する能力を習得する。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第6回：4年生の報告を聞き討論に参加。その後サブ・ゼミ（共同調査研究報告のグループ分け、各グループで構成・内容の検討（1）（2）、共同調査研究計画の概要報告）
第7回 - 第9回：課題（作業シート）の報告と質疑応答（1回につき4・5人）
第10回 - 第14回：共同調査研究の中間報告1 - 5（1回につき1グループ）
第15回：個人研究テーマの発表（全員）
第16回 - 第30回：個人研究の報告（1回につき3人）

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	出席 / 参加 20%、発表 80%。
その他 Other	%	

備考
Note 要望事項：本演習を、自分でやりたいテーマを見つけ、それに真剣に取り組む学生諸君の知的トレーニングの場としたい。これまで勉強してこなかった、そろそろ勉強したいという者、大学院進学準備をしたい者も歓迎される。政党、選挙・投票行動などに興味をもつ履修希望者には、3年配当の政党論、政治過程論を履修することを奨める。また、履修希望者のうち政治学原論を未履修の者は、それも同時に登録・履修することが望ましい。

関連URL
URLs for References

政治学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
124	政治学演習 (笹田栄司)	通年	3年以上：4単位	笹田 栄司 政政・経演・国演

副題
Subtitle

現代の司法

授業概要
Course Description

行政や国会に比べ変わるのことがなかった司法制度は、20世紀末に始まる改革によって大きく変容した。また、消極的と批判されることの多かった違憲審査も司法制度改革や憲法改正論議を経て積極的な動きを見せている。本演習は、近年、注目されることの多い司法について、法学、政治学、そしてメディアなどによる分析を検討することによって、司法制度の現状と問題点を把握することを狙いとする。まず、司法に強い関心を持っていることが重要である。司法についての知見が段階的に獲得できるよう演習プログラムを構成していくので、現時点での司法についての知識は問わない。演習の前半は、授業計画に挙げている教科書から割当てられたテーマの研究報告を受講生が行い、その報告に基づいて、全員で討論する。後半は、司法についての関心に応じて各自が自由にテーマを決め、研究報告を行う。

授業の到達目標
Objectives

司法制度の重要な柱である違憲審査制・最高裁判所・裁判官制度、近年導入された裁判員制度・検察審査会、そして裁判への影響が批判されている司法行政などについて、制度の概要及びその問題点を理解するとともに、関連する資料を調査し、自分の考えをまとめ、発表し、討論する能力の向上を目指す。

授業計画
Course Schedule

第1回：開講に当たって
第2回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第3回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第4回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第5回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第6回：市川・酒巻・山本『現代の裁判』第5版を読む
第7回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第8回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第9回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第10回：山口・宮地『最高裁の暗闘』を読む
第11回：新藤『司法官僚』を読む
第12回：新藤『司法官僚』を読む
第13回：新藤『司法官僚』を読む
第14回：新藤『司法官僚』を読む
第15回：前半の理解度の確認
第16回 - 第29回：受講生と相談の上決定したテーマについて、各自報告する。
第30回：まとめ 期末レポートの講評

教科書
Textbook(s)

市川正人・酒巻匡・山本和彦『現代の裁判』第5版（有斐閣、2008年）、山口進・宮地ゆう『最高裁の暗闘』（朝日新書、2011年）、新藤宗幸『司法官僚』（岩波新書、2009年）

参考文献
Reference Book(s)

笹田栄司『司法の変容と憲法』（有斐閣、2008年）、木佐茂男他『テキストブック現代司法』第5版（日本評論社、2009年）

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考
Note

憲法を未履修のゼミ生は、三年次に必ず履修すること。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
201	経済学演習（荒木一法）	通年	3年以上：4単位	荒木 一法 政政・経演・国演

副題
Subtitle 企業と家計の行動分析（応用ミクロ経済学）

授業概要
Course Description

（目的）本演習は、企業と家計の行動分析を題材として、参加者の分析力とコミュニケーション能力を向上させることを主たる目的とします。

（方法）伝統的なミクロ経済学に加えて、ゲーム理論や契約理論を具体的な分析事例を交えて学ぶことで、参加者の分析力の質を高め、幅を広げる事を試みます。また、プレゼンテーションと討論の機会をできるだけ多く確保するとともに、適宜短いレポートの提出を求め、参加者の「話す力」「書く力」の向上に努めます。

（題材の説明）企業の投資・資金調達行動、資金仲介者（銀行・証券会社等）の行動、さらには家計の消費・貯蓄・資産選択行動を分析対象とします。これらのトピックを理論的に扱った文献ならびに関連ニュースを報じる新聞・雑誌の記事を題材とします。まず、邦文文献ならびに記事を題材にゼミを進め、後に英文文献ならびに記事を導入する予定です。

授業の到達目標
Objectives

- ・状況に応じた効果的プレゼンテーションをおこなうことができる。
- ・ディスカッションにおいて、自らの考えを正確に伝えることができる。
- ・ミクロ経済理論の応用力を強化し、与えられた事例に即応的分析を加えることができる。

授業計画
Course Schedule

第1回：プレゼンテーションの技術（講義）
 第2回 - 第14回：履修者による発表と議論
 第15回：夏合宿および秋学期ゼミの課題設定
 第16回 - 第29回：履修者による発表と議論
 第30回：3年ゼミ活動のまとめと進路指導

教科書
Textbook(s) 教員が指定する教科書候補の中から、参加者が相談して決定します。

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	夏合宿での課題提出、秋学期の研究内容をまとめたレポートは必須。
平常点評価 Class Participation	50 %	担当箇所の理解力およびプレゼンテーション能力の水準およびその向上の度合いを評価。
その他 Other	%	

備考
Note 応募時に経済学入門A、ミクロ経済学、解析学入門（もしくは解析学）の3科目について単位を取得済みであること、および別途詳細を掲示する2回のゼミ説明会のいずれか1回に出席することを応募の前提条件とします。本演習の目標に賛同し、チャレンジする意志を持った元気ある諸君の応募を大歓迎します。

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
202	経済学演習 (有村俊秀)	通年	3年以上：4単位	有村 俊秀 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

環境経済学

授業概要
Course Description

地球温暖化問題、大気汚染問題、廃棄物問題などの環境問題を、ミクロ経済学を用いて分析する環境経済学を学びます。同時に、実証分析のための統計分析・計量分析の手法も学びます。そのため、コンピュタールームでの統計分析の実習も予定しています。前半は、教科書の輪読を行いながら、研究活動の方法について理解を深めます。そして、次年度のゼミ論執筆のための研究構想の発表、および研究の準備を行います。欧州や米国の環境政策についても学びます。

授業の
到達目標
Objectives

本演習では、2年間をかけて、環境経済学の論文を書くことを目標としています。そのため、1年目は、環境経済学の考え方を理解することを目指します。論文執筆では、定量分析をすることを目指すため、分析に必要な統計学、計量経済学の手法を修得することも目標です。必要に応じて、英文文献を読めるようになる事も大きな目標です。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：ガイダンス
- 第2回：環境規制の政策評価の現状と経済学の基礎理論
- 第3回：統計学演習(1)：環境・経済データのグラフ作成
- 第4回：統計学演習(2)：環境・経済データの単回帰分析
- 第5回：統計学演習(3)：環境・経済データの重回帰分析
- 第6回：統計学演習(4)：統計検定
- 第7回：輪読(1) 環境規制の経済分析の事例：大気汚染政策(1)
- 第8回：輪読(2) 環境規制の経済分析の事例：大気汚染政策(2)
- 第9回：輪読(3) 環境規制の経済分析の事例：大気汚染政策(3)
- 第10回：輪読(4) 環境規制の経済分析の事例：温暖化政策(1)
- 第11回：一般化費用アプローチ(1)
- 第12回：一般化費用アプローチ(2)
- 第13回：輪読(5) 環境規制の経済分析の事例：温暖化政策(2)
- 第14回：輪読(6) 環境規制の経済分析の事例：温暖化政策(3)
- 第15回：輪読(7) 環境規制の経済分析の事例：廃棄物政策
- 第16回：研究構想発表(1)
- 第17回：研究構想発表(2)
- 第18回：研究構想発表(3)
- 第19回：研究構想発表(4)
- 第20回：研究構想発表(5)
- 第21回：計量経済学演習(1)：時系列データ分析
- 第22回：計量経済学演習(2)：クロスセクションデータ分析
- 第23回：計量経済学演習(3)：離散選択モデル分析(1)
- 第24回：計量経済学演習(4)：離散選択モデル分析(2)
- 第25回：研究発表(1)
- 第26回：研究発表(2)
- 第27回：研究発表(3)
- 第28回：研究発表(4)
- 第29回：研究発表(5)
- 第30回：まとめ

教科書
Textbook(s)

「環境規制の政策評価：環境経済学の定量的アプローチ」有村俊秀・岩田和之著(上智大学出版社・ぎょうせい)

参考文献
Reference Book(s)

「入門 環境経済学」 日引聡・有村俊秀著(中央公論新社)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考 Note	統計学、計量経済学の知識を持っている方が望ましいですが、理論分析、環境政策の制度に関心がある人も歓迎します。
-------------	--

関連URL URLs for References	http://pweb.sophia.ac.jp/arimura/index-j.htm
------------------------------	---

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
203	経済学演習 (石井安憲)	通年	3年以上：4単位	石井 安憲 政政・経演・国演

副題
Subtitle 国際貿易と投資の経済学演習

授業概要
Course Description ミクロ経済学、国際経済学・貿易論に関する書物を選択し、それらを輪読・討論形式で呼んでいく予定。ただし、現実の経済問題を理解するためには、幅広い経済的知識を必要とするので、国際環境経済学・国際マクロ経済学等の書物も並行して読むことがある。

授業の到達目標
Objectives 国際開放経済、特に国際開放ミクロ経済分野に関する経済諸問題を解明するために必要なミクロ経済学を中心に、可能であれば、さらに広くマクロ経済学の基礎を再検討し、4年次における卒論作成において使用する経済理論の完全習得を到達目標とする。

授業計画
Course Schedule
第1回 - 第2回：ミクロ経済学について
第3回 - 第5回：消費者行動について
第6回 - 第9回：企業行動について
第10回 - 第12回：市場分析について
第13回 - 第16回：市場の失敗について
第17回 - 第18回：不完全競争について
第19回 - 第21回：環境問題について
第22回 - 第24回：不確実性の経済学について
第25回 - 第29回：卒論課題について
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)
3年生 前半：石井安憲編著『現代ミクロ経済学』、東洋経済新報社
後半：トピックス毎にコピー資料配付。
4年生 卒論課題に応じて、グループ毎に適当な書物・資料を入手。

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	ゼミ報告の適切性と内容を総合的に評価する。
平常点評価 Class Participation	30 %	ゼミ討論への参加度と内容を総合評価する。
その他 Other	40 %	ゼミへの出席を極めて重視する。

備考
Note 本ゼミでは、ディスカッションを主とするので、本ゼミへの参加を通じて、学問的知識の理解はもちろんのこと、物事に対し自発的かつ協力的に取り組む積極性と協調性を養って欲しい。ただし、「時間厳守は、君子の礼儀」を座右の銘にしているので、無断欠席・遅刻を常とする者は、本ゼミへの参加を機にその態度を改めることが望まれる。なお、本ゼミ希望者は、石井担当の国際貿易理論を受講することが望ましい。

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
204	経済学演習 (稲葉敏夫)	通年	3年以上：4単位	稲葉 敏夫 政政・経演・国演

副題
Subtitle 経済分析における統計的方法の研究

授業概要
Course Description 情報技術革命の進展に伴い、大量のデータが利用できるようになり、データ処理に対するニーズはますます高まってきている。その様なニーズは、従来の統計学の枠組みを拡大させつつある。今やデータを簡単にダウンロードし、準備された統計計算用のソフトを使えば、意味が有ろうと無かろうとたちどころに計算してくれる。しかし、データ分析を意味あるものにするためには、それぞれの統計的方法の背景や前提を知ってなければならない。回帰分析などの基本的方法を習得するとともに、時系列分析やデータマイニングなどの最近の動向も含めた統計的方法も取り上げる。

授業の到達目標
Objectives 統計学の基礎的概念や統計的推測(推定、検定)の習得を確実なものにする。回帰分析の手法を習得するとともに、時系列分析やデータマイニングなどの最近の動向の基礎についても学ぶ。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第5回：時系列データ：古典的時系列分析
第6回 - 第10回：景気変動：景気指標の作成方法と実際
第11回 - 第15回：回帰分析
第16回：春学期理解度の確認
第17回 - 第21回：データマイニング
第22回 - 第26回：指数：物価指数と数量指数
第27回 - 第29回：回帰分析：再考
第30回：秋学期理解度の確認

教科書
Textbook(s) 開始時に指示。

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	60 %	
平常点評価 Class Participation	40 %	
その他 Other	%	

備考
Note 関連科目：必ずしも前提とはしないが、統計学の基礎およびパソコンの基本的操作を習得していることが望ましい。

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
205	経済学演習 (上田貴子)	通年	3年以上：4単位	上田 貴子 政政・経演・国演

副題
Subtitle

経済データ解析：－日本の所得分配－

授業概要
Course Description

本演習は、データ及びデータ分析に基づいて自ら調べ考える姿勢を身につけることを目標とする。演習αではデータ分析を基にした経済学での研究をとりあげる。本年のテーマは、「日本の所得分配」である。所得格差はデータやデータ分析に基づかないままに社会で議論されている向きがあるため、データに基づく経済学文献を講読する。演習βでは、自らテーマを選択し、関連文献やデータの調査を行い、統計ソフトウェアを使用してデータ解析を行って論文にまとめることとする。

授業の
到達目標
Objectives

学生諸君の多くは大学卒業後、社会へ巣立つ。周囲に氾濫する情報や一般常識などを鵜呑みにするのではなく、自分にとっての「正解」を自分でみつけていく能力は、職業生活においても個人生活においても役にたつと本教員は考えている。本演習では、自ら疑問を持ち、調査を行い、数字やデータなどの客観的根拠をもって自らの考えをまとめ、さらにその考えを他者に向かってわかりやすくアピールする能力の基本を身につけることを目標とする。

授業計画
Course Schedule

指定文献の講読を行う。1－2回で1章を読み進める。

- (1) 事前に指定した報告者1－2名が文献の内容を報告する。
- (2) 報告者は要約の配布、板書等を使い、わかりやすく報告を行うことが求められる。
- (3) その他の演習参加者も事前に文献を読んでくることを義務とする。
- (4) 毎回、文献の内容について意見を求め、討論を行う。
- (5) 演習は出席を原則とする。無断欠席は本演習の放棄とみなす。

[春学期]

第1回： 春学期の演習の進め方について・報告の割り当て

第2－13回： 大竹文雄（著）「日本の不平等：格差社会の幻想と未来」を購読する。

第14－15回： まとめと討論、秋学期の文献の選択について

[秋学期]

第16回： 秋学期の演習の進め方について・報告の割り当て

第17－28回： 指定文献を購読する。

（この間、ゼミ論のテーマ選択、中間報告を行うが、回数は演習参加者人数により調整を行う。）

第29－30回： ゼミ論の発表、提出

教科書
Textbook(s)

「日本の不平等：格差社会の幻想と未来」、大竹文雄（著）、2005年、日本経済新聞社。
（春学期の予定、変更の可能性がある。秋学期は未定。）

参考文献
Reference Book(s)

「日本の所得格差と社会階層」、樋口美雄＋財務省財務総合政策研究所（編著）、2003年、日本評論社
「日本の所得分配」、小塩隆士他（編）、2006年、東京大学出版会
「日本の所得と富の分配」、石川経夫（編）、1994年、東京大学出版会

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	60 %	統計分析を必須とする。ゼミ論の書き方と評価ポイントとは別途配布する。
平常点評価 Class Participation	40 %	出席、文献購読の報告、討論への参加、ゼミ論の報告含む。
その他 Other	%	

備 考 Note	<p>ゼミ論の作成のためには、統計学の知識と統計ソフトウェアを使用した統計分析手法が必須であるが、演習ではこれらの授業は行わないので、関連の授業を履修する必要がある。「統計学入門」は既に履修済みであること。また、本演習α終了時まで「統計学」「計量分析」を履修すること。なお、「計量経済学」「現代経済政策分析」の履修も強く推奨する。</p>
-------------	---

関連URL URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
206	経済学演習 (牛丸聡)	通年	3年以上：4単位	牛丸 聡 政政・経演・国演

副題
Subtitle

わが国財政のあり方の検討

授業概要
Course Description

少子・高齢化や女性の社会進出などの社会構造の変化や低成長をはじめとした経済構造の変化に対応させて、また、国際社会においてわが国が信頼される役割を果たすためにも、私たちはわが国財政のあり方を改めて検討しなければならない。本演習では、そうした事柄に関心をもつ学生が集まり、わが国の財政に関するテーマを自由に選択し、それについて研究を行い、今後のわが国のあり方について熱く議論する。

授業の到達目標
Objectives

毎回のゼミにおける班活動を行いながら知識を増やし、人格を形成し、12月のイベントを成功させること。個人としては、最終的に良い卒業論文を完成させること。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：(春学期)班活動(1) 同時に個別指導
- 第2回：(春学期)班活動(2) 同時に個別指導
- 第3回：(春学期)班活動(3) 同時に個別指導
- 第4回：(春学期)班活動(4) 同時に個別指導
- 第5回：(春学期)班活動(5) 同時に個別指導
- 第6回：(春学期)班活動(6) 同時に個別指導
- 第7回：(春学期)班活動(7) 同時に個別指導
- 第8回：(春学期)班活動(8) 同時に個別指導
- 第9回：(春学期)班活動(9) 同時に個別指導
- 第10回：(春学期)班活動(10) 同時に個別指導
- 第11回：(春学期)班活動(11) 同時に個別指導
- 第12回：各班における報告会・質疑応答(1)
- 第13回：各班における報告会・質疑応答(2)
- 第14回：春学期理解度の確認
- 第15回：反省と秋学期に向けての打ち合わせ
- 第16回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(1) 同時に個別指導
- 第17回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(2) 同時に個別指導
- 第18回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(3) 同時に個別指導
- 第19回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(4) 同時に個別指導
- 第20回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(5) 同時に個別指導
- 第21回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(6) 同時に個別指導
- 第22回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(7) 同時に個別指導
- 第23回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(8) 同時に個別指導
- 第24回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(9) 同時に個別指導
- 第25回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(10) 同時に個別指導
- 第26回：(秋学期)イベントに向けての準備と学習(11) 同時に個別指導
- 第27回：公開イベント開催
- 第28回：公開イベントに関する反省
- 第29回 - 第30回：1年におけるゼミ学習の総括

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	3年生の場合、最後のレポート。4年生の場合、卒業論文。
平常点評価 Class Participation	25 %	毎回のゼミの出席状況とその参加態度。
その他 Other	25 %	12月に行われるイベントとそれに向けての態度。

備 考 Note	学生に対する要望：
	<p>(1) ゼミを重視し、ゼミ活動に必ず出席してほしい。</p> <p>(2) なごやかさの中にも厳しさを持ち、人間としてお互いを尊重し、同時に協調の中でも学ぶという姿勢を大切にしようとする学生の参加を期待している。</p> <p>(3) 勉強を一所懸命にやることはもちろんだが、それとともに、視野を広くもち、趣味も豊かで、人間や社会のあり方について誠実に語る学生であってほしい。</p> <p>(4) 財政学の講義を受講していること。まだ受講していない人はこれから必ず受講するように。</p>

関連URL URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
207	経済学演習 (荻沼隆)	通年	3年以上：4単位	荻沼 隆 政政・経演・国演

副 題
Subtitle 不完全情報とゲームの理論を中心としたマイクロ経済学

授業概要
Course Description この演習では、主に、不完全情報の経済学とゲームの理論を用いた経済分析を学ぶ。この分野は、マイクロ経済学の中級レベル以上のテキストにはほとんど含まれているが、マイクロ経済学の講義の中では、通常部分的にしかカバーできていない。この講義では、まず不完全情報の経済学とゲームの理論の標準的な内容を学習する。その上で、限定合理性を考慮した分析のように発展的な研究を行うか、特定の分野に関するやや現実的な応用研究を行うことを目的とする。

授業の到達目標
Objectives ミクロ経済学・ゲーム理論の基本的内容を理解し、それらを現実の経済問題の分析に用いることができるように学習する。

授業計画
Course Schedule (α) 第1回～第15回：マイクロ経済学もしくはゲーム理論のテキストを輪読し、その内容について議論する。
(α) 第16回～第30回：ゲーム理論もしくは行動経済学についてのテキストを輪読し、その内容について議論する。
(β) 第1回～第5回：今迄学んだ内容に関連する領域のテキストを読み、それについて議論する。
(β) 第6回～第30回：各自のゼミ論文のテーマについて、それぞれの段階での中間発表を行う。

教科書
Textbook(s) 未定。

参考文献
Reference Book(s) 未定。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	70 %	内容の正確さおよび問題設定・分析力を考慮する。
平常点評価 Class Participation	30 %	出席および授業への参加度を総合的に考慮する。
その他 Other	%	

備 考
Note 学生に対する要望：マイクロ経済学とゲーム理論に関係する演習なので、演習参加者は、事前にマイクロ経済学とゲーム理論の基礎知識があることが望まれる。それがあまりない場合は、演習での最初のテキストブックの学習の時点で、キャッチアップするやる気のあることが前提条件になる。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
208	経済学演習 (小倉義明)	通年	3年以上：4単位	小倉 義明 政政・経演・国演

副題
Subtitle 金融制度、規制、取引慣行の理論と実態

授業概要
Course Description 2007年半ばから現在に至る金融危機の原因のひとつが、金融技術革新に規制が充分に対応できていなかったことにあるとの反省から、欧米を中心に金融再規制の議論が盛んに行われてきた。規制内容の是非については依然として議論の余地が残るものの、そのような議論の一応の帰結の代表例が2010年に米国で制定されたDodd-Frank法である。日本もこうした新規制の潮流の外にあるわけではない。この最近の劇的な変化を題材として、金融制度、規制、あるいは取引慣行の背景にある金融理論の基本ロジックを学ぶと同時に、自らロジックを組み立て、文章あるいはプレゼンテーションとしてそれを表現する訓練をする。

授業の到達目標
Objectives この演習では、以下の4点を目標とする。
1. 金融制度、規制、取引慣行の背景にある金融理論のロジックを体系的に理解すること。
2. 最近の金融制度に関する議論とその意味を知ること。
3. 自分の前提とする仮定を意識しつつ、自らロジックを組み立て、それを表現できるようになること。
4. 英語による情報収集に慣れること。

授業計画
Course Schedule 第1回：オリエンテーション・打ち合わせ
第2 - 7回：テキスト輪読・検討 Part 2: Systemic Risk (毎回2名程度が担当箇所を報告)
第8 - 11回：テキスト輪読・検討 Part 3: Shadow Banking
第12 - 14回：テキスト輪読・検討 Part 4: Credit Markets
第15回：ゼミ論文構想発表会
第16 - 26回：指定する学術論文の輪読・検討
第27 - 30回：ゼミ論文報告・検討会

教科書
Textbook(s) 前期： Acharya, V., T. Cooley, M. Richardson, and I. Walter, *Regulating Wall Street: The Dodd-Frank Act and the New Architecture of Global Finance*, 2011, John Wiley & Sons.
後期： 金融制度・規制・取引慣行に関連する重要な学術論文を指定する。

参考文献
Reference Book(s) 授業中に関連する論文等を紹介する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	3年生後期終了時にゼミ論文を提出すること。
平常点評価 Class Participation	70 %	出席。報告。議論への活発な参加。
その他 Other	%	

備考
Note ミクロ経済学 ・ 、マクロ経済学 ・ 、金融論を履修済みであること、あるいは並行して履修していることが望ましい。
計量経済学 ・ を並行して履修すると論文テーマの幅が広がるのでなお良い。

私事ですが、2012年4月着任予定です。以下のサイトに自己紹介があります。

関連URL
URLs for References

http://www.ritsumei.ac.jp/~yogura/index_ogura.html

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
209	経済学演習 (笠松学)	通年	3年以上：4単位	笠松 学 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

経済成長と所得分配

授業概要
Course Description

一国内で毎年新たに生産される生産物（GDP）は、長い期間で見ると増加する場合が多い。これを経済成長という。他方このGDPは所得として主体に分配される。また人々は、遺贈・相続・贈与といったかたちで、富をやり取りする。このような所得や富の分配と経済成長との関係について調べる。

本演習では経済成長と分配に関する様々な問題、たとえば、GDPは賃金と利潤とにどのような仕組みで分配されるのか、分配のされ方で経済成長率が変わってくるのか、世界の中の貧しい国々は豊かな国々に追いつくことができるのか、あるいは、少子・長寿化は分配にどのような影響を及ぼすのか、といった問題を、文献を読みながら、あるいは議論をしながら考え、経済学の一層着実な理解の助けとする。

最後に、そうした中から各自でテーマを選び、一つの論文として仕上げる。

授業の
到達目標
Objectives

1. 自分以外の人達の報告に質問・コメントしたり、自分の観点に基て議論できるようになる。
2. 自分の関心に従ってテーマを決め必要な準備の下で論文を完成させる。

授業計画
Course Schedule

- 第1回 - 第5回：成長論の検討・討論
第6回 - 第10回：分配理論の検討・討論
第11回 - 第15回：成長・分配理論の応用
第16回 - 第22回：各時のテーマに基く発表・討論
第23回 - 第29回：卒業論文の中間報告・討論
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

春学期は、基礎的な知識を身に付けるために充当する。どのようなテキストを使用するかは参加者と相談して決める予定。

参考文献
Reference Book(s)

フォーリー&マイクル（佐藤・笠松監訳）、『成長と分配』（2002年、日本経済評論社）を参照すると成長・分配理論の内容の一部を知ることができる。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	参加・報告をし、質疑に参加し、エッセイを書き論文を完成させる。
その他 Other	%	

備 考
Note

演習は、講義では十分にできない小人数の参加者間での質疑応答や議論を通じて、自分の経済学（に止まらない、その他の分野の）理解を確認し、深めるために絶好の機会となる。また、これまでの経済学の勉強内容に不安がある場合でも、それを解決できる絶好の場にもなる。積極的に活用して欲しい。

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
210	経済学演習 (金子昭彦)	通年	3年以上：4単位	金子 昭彦 政政・経演・国演

副題
Subtitle 国際金融

授業概要
Course Description まず、国際金融理論への動学的アプローチの基礎を学ぶ。その後、参加者各自の興味を踏まえた上で、動学的アプローチの応用もしくは以下の参考文献にあるような別トピックに移る。

授業の到達目標
Objectives 国際金融への動学的アプローチを理解する。論文レベルの英文を読めるようになる。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第15回：異時点間取引と経常収支
第16回 - 第27回：各自の興味を踏まえたトピックを取り上げて文献講読
第28回 - 第30回：個人研究のテーマ決定

教科書
Textbook(s) Foundations of International Economics, Maurice Obstfeld and Kenneth Rogoff, The MIT Press

参考文献
Reference Book(s) Globalization and the International Financial System, Peter Isard, Cambridge
Financial Crises, Liquidity, and the International Monetary System, Jean Tirole, Princeton University Press

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	学んだ知識を使って現実の経済を説明できているか。
平常点評価 Class Participation	70 %	出席状況、予習。
その他 Other	%	

備考
Note ミクロ経済学、マクロ経済学の内容を理解していること。英語文献の読解能力の高さ、自習時間に時間をかけることが望まれる。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
211	経済学演習 (川口浩)	通年	3年以上：4単位	川口 浩 政政・経演・国演

副題
Subtitle 日本経済の歴史的展開とその思想

授業概要
Course Description 経済という行為は、時代・地域を問うことのない人間の普遍的な営為の一つである。しかし、経済の実態は、それが有限定された時代・地域における特定の人々の行為の結果である故に、一様なものではない。日本列島と呼ばれる地域に展開した経済も、地理的・時代的条件とそこに生きた人々の特質とが作り上げた一つの人間活動の結果である。本演習は、日本における近世 - 近現代の経済の実態、及びそれを担った人々の経済思想に接近することを課題とする。ゼミ生の選考に際してはあらかじめレポートを提出してもらい、そのうえで面接を行う。選考の第1基準は、積極的な学習姿勢である。各週の授業は勿論、合宿その他の活動への積極的参加も必須である。また、本演習の参加者には、すべての経済史関係科目の履修を義務づける。

授業の到達目標
Objectives 日本の経済史および経済思想史の特性を専門的に理解すること。

授業計画
Course Schedule 第1回：ゼミの運営について説明
第2回 - 第29回：文献輪読と討論
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s) 太田愛之・川口 浩・藤井信幸『日本経済の二千年』（勁草書房、2006年）
川口 浩編著『日本の経済思想世界』（日本経済評論社、2004年）

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	専門的知識の習得度。
平常点評価 Class Participation	80 %	積極的な授業参加。
その他 Other	%	

備考
Note 正当な理由のない欠席等の怠業は一切認めない。
以後の出席無用。

関連URL
URLs for References <http://www.waseda.jp/sem-jp-kei-sisou/index.html>

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
212	経済学演習 (古賀勝次郎)	通年	3年以上：4単位	古賀 勝次郎 政政・経演・国演

副題
Subtitle 自由主義の政治経済学研究

授業概要
Course Description 近代社会はこれまで、大まかに言って、自由主義と社会主義との対立を軸として展開してきた。しかし近年の社会主義に対する知的信頼の低下で、最近では自由主義陣営内部の対立となっており、英米型自由主義、ドイツ型(オールド)自由主義、修正自由主義(社会民主主義もこれに入る)などが相争っているのが現状である。この争いの中から、どのような新しい二十一世紀に相応しい自由主義が生まれてくるのか興味深い。まずは自由主義の歴史を正確に理解することが重要で、J・ロック、D・ヒューム、A・スミス、J・S・ミルから現代のJ・ロールズやF・ハイエクに至るまでの自由主義の政治経済学を学ぶことにする。

授業の到達目標
Objectives 古典を自力で読破できる力を養う。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第6回：『経済学：名誉と現代』（日本経済新聞社）講読
第7回 - 第10回：『いまこそハイエクに学べ』（仲正昌樹著、春秋社）講読
第11回 - 第15回：『ハンナ・アーレント入門』（杉浦敏子著、藤原書店）講読
第16回 - 第30回：個人研究発表
その他合宿で発表 9月下旬 夏合宿（2泊3日）
12月下旬 冬合宿（2泊3日）

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s) 大河内一男『アダム・スミス』（講談社）、拙著『ヒューム体系の哲学的基礎』（行人社）、トマス『J・S・ミル』（雄松堂）、渡辺幹雄『ロールズ正義論とその周辺』（春秋社）、拙著『ハイエクと新自由主義』（行人社）、八木他編『経済思想史』（名大出版会）。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
213	経済学演習 (近藤康之)	通年	3年以上：4単位	近藤 康之 政政・経演・国演

副題
Subtitle

応用計量経済学

授業概要
Course Description

複雑な経済現象のメカニズムをシステムとして把握し、データに基づいて具体的に分析するのが計量経済学の役割です。この演習では、分析に用いる統計的手法についての研究（計量経済学理論）よりも、実際にデータを用いた分析（応用計量経済分析）を重点テーマとします。

分析を行うためには分析方法についての理解が必要です。様々な分析方法の中でも、産業連関分析と回帰分析を学びます。産業連関分析は、多くの産業のあいだの投入・産出を通じた相互依存関係を考慮した波及効果の分析に適した方法です。製品・サービスのサプライチェーンを遡及して分析するための方法とも言えます。例えば「万博の経済効果は〇〇円」「乗用車1台のライフサイクルで排出される二酸化炭素排出量は〇〇kg」といった評価に用いられます。回帰分析は、経済変数間の因果関係を想定した統計的分析手法です。例えば「自治体指定ごみ袋の価格が1枚40円から100円へと上昇すると、ごみ排出量は1日あたり〇〇kg減少する」といった評価に用いられます。

学んだ方法をデータに適用して分析すること、およびレポート執筆と口頭発表を通してソフトウェア使用とプレゼンテーションの技術を向上することも重視します。

授業の到達目標
Objectives

計量経済分析（産業連関分析と回帰分析）の基礎的方法を理解し、それを実際にデータに適用して分析を行えるようになること。また、分析結果をレポートおよび口頭により発表する技術を向上すること。

授業計画
Course Schedule

第1回－第2回：産業連関分析の概要
第3回－第4回：回帰分析の概要
第5回－第6回：産業連関分析の実際（1）
第7回－第8回：産業連関分析の実際（2）
第9回－第10回：回帰分析の実際（1）
第11回－第12回：回帰分析の実際（2）
第13回－第14回：発展的な産業連関分析の方法
第15回－第16回：発展的な回帰分析の方法
第17回－第18回：産業連関分析の実際（3）
第19回－第20回：産業連関分析の実際（4）
第21回－第22回：回帰分析の実際（3）
第23回－第24回：回帰分析の実際（4）
第25回－第26回：期末レポート執筆の準備（1）
第27回－第28回：期末レポート執筆の準備（2）
第29回：期末レポートの概要報告
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

未定。後日決定します。

参考：平成21年度以前に使用した教科書

- ・山本 拓『計量経済学』新世社、1995年
- ・中村慎一郎『Excelで学ぶ産業連関分析』エコノミスト社、2000年

参考文献
Reference Book(s)

学期の途中で随時指示します。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考 Note	以下の講義を3年次に必ず登録・履修してください：計量経済学 α ・ β 、担当教員による経済学研究。
-------------	---

関連URL URLs for References	http://www.f.waseda.jp/ykondo/ja/
------------------------------	---

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
214	経済学演習 (西郷浩)	通年	3年以上：4単位	西郷 浩 政政・経演・国演

副 題
Subtitle 社会分析のための統計的手法

授業概要
Course Description

社会の実証分析に使われる統計的手法の理論を学習し、それを分析用具として各自のテーマに応じて実際のデータを分析する。

社会の動きは統計データによってとらえられる。したがって、社会の動きを分析し、その将来を予測するためには、統計的手法が不可欠である。この演習の目的は、それらの分析手法の理論的な基礎を学習し、それを応用して実証分析をおこなうことにある。

1年度配当の「統計学入門」および「統計学」を前提として、テキストを選択する。したがって、これら2科目を履修済もしくは受講中であることが応募の要件である。演習参加者には、合宿および集中ゼミへの参加を義務づける。このため、それらに必ず参加できることも応募の要件である。

この他、3年進級時に残り2年間で卒業できる単位数を取得していること、普通の講義の出席状況がよいこと(8割以上)も必要である。

授業の到達目標
Objectives

ソフトウェアRによる統計分析の技術取得。

授業計画
Course Schedule

第1回：教科書の決定、年間予定の確認
 第2回 - 第29回：教科書の輪読(1) - (28)
 第30回：教科書の輪読(29)、ゼミレポート提出

教科書
Textbook(s)

社会の分析に使われる統計分析の手法を解説した教科書を、受講者確定後に決定します。フリーソフトウェア Rによる統計分析をあつかった教科書を選ぶ予定です。

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	分析目的の説明の明解さ、データの適格さ、分析手法の妥当性。
平常点評価 Class Participation	50 %	ハンドアウトの質、説明の質、グループのチームワーク。
その他 Other	%	

備 考
Note

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/saigo/>

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
215	経済学演習 (笹倉和幸)	通年	3年以上：4単位	笹倉 和幸 政政・経演・国演

副題
Subtitle

上級マクロ経済学

授業概要
Course Description

1年次の「経済学入門A・B」、2年次の「マクロ経済学」で修得した経済学の知識を前提として、マクロ経済学の理論についてさらに歴史的・数学的に研究する。そのため英語力と数学力が重要になる。さらに、マクロ経済学のゼミであるため、政経学部設置科目「マクロ経済学」を履修していることを必要条件とする（未履修の場合は3年次で必ず履修すること）。

具体的には、マクロ経済理論に関する英語を中心とした学術文献の読解、そしてそれに基づく議論がこのゼミの中心である。それらを通して、マクロ経済学のどの部分が正しくて、どの部分がそうでないか（そしてさらには、どうすればそれを克服できるか）、という（大きな）問いに対して自分自身の答えを少しでも見つけてほしい。

なお、このゼミでは（たとえばサブプライム問題や戦後日本の経済発展というような）時事的・実証的内容は直接的な研究対象ではないので十分注意してほしい。

授業の到達目標
Objectives

マクロ経済学を歴史的・理論的に十分理解し、マクロ経済学の現状に対して自分自身の考えをもてるようになることを目標とする。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：ケインズ『一般理論』
- 第2回：古典派理論とセイの法則
- 第3回：有効需要の原理
- 第4回：消費理論
- 第5回：乗数理論
- 第6回：投資理論
- 第7回：流動性選好説
- 第8回：貨幣数量説
- 第9回：ハロッドの経済動学
- 第10回：ケインズ派の景気循環理論
- 第11回：ヒックスとIS-LMモデル
- 第12回：マネタリズムと合理的期待形成学派
- 第13回：新しいケインズ派経済学
- 第14回：新古典派経済成長理論
- 第15回：フリードマンとケインズ
- 第16回：IS-LMモデルの理論的整合性
- 第17回：短期モデルと長期モデルの統合に向けて
- 第18回：サミュエルソンの新古典派総合
- 第19回：IS-LMモデル、AD-ASモデル、ソロー・モデル
- 第20回：2部門モデル
- 第21回：消費財市場の均衡
- 第22回：投資財市場の均衡
- 第23回：長期の定義
- 第24回：黄金律状態の分析
- 第25回：消費関数論争
- 第26回：トービンのq
- 第27回：MM定理
- 第28回：動学的最適化理論とマクロ経済理論
- 第29回：オイラー方程式と横断性条件
- 第30回：リアル・ビジネス・サイクルの理論

教科書
Textbook(s)

(1) ケインズ(塩野谷祐一訳)『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社、1995年。

(2) ローマー(堀雅博・岩成博夫・南條隆訳)『上級マクロ経済学』日本評論社、2010

年。

(3) Mankiw, N. Gregory, 2006, "The Macroeconomist as Scientist and Engineer," *Journal of Economic Perspective*, Vol. 20, pp. 29-46.

(4) Lucas, Robert E., Jr., 1972, "Expectations and the Neutrality of Money," *Journal of Economic Theory*, Vol. 4, pp. 103-124.

(5) Dixit, Avinash K., and Joseph E. Stiglitz, 1977, "Monopolistic Competition and Optimum Product Diversity," *American Economic Review*, Vol. 67, pp. 297-308.

(6) Yun, Tack, 1996, "Nominal Price Rigidity, Money Supply Endogeneity, and Business Cycles," *Journal of Monetary Economics*, Vol. 37, pp. 345-370.

[上記輪読予定論文(3)-(6)は変更の可能性がある。]

参考文献
Reference Book(s)

- (1) 吉川洋『現代マクロ経済学』創文社、2000年。
- (2) スノードン=ヴェイン(岡地勝二訳)『マクロ経済学はどこまで進んだか』東洋経済新報社、2001年。
- (3) A. C. チャン(小田正雄他訳)『動学的最適化の基礎』シーエーピー出版、2006年。
- (4) パロー=サラ-イ-マーティン(大住圭介訳)『内生的経済成長論(第2版)』九州大学出版会、2006年。
- (5) Mankiw, N. Gregory, 1990, "A Quick Refresher Course in Macroeconomics," *Journal of Economic Literature*, Vol. 28, pp. 1645-1660.
- (6) Koopmans, Tjalling C., 1965, "On the Concept of Optimal Economic Growth," in *The Econometric Approach to Development Planning*, Amsterdam: North-Holland, pp. 225-287.

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	40 %	3年次はタームペーパー、4年次はゼミ論文の質で評価する。
平常点評価 Class Participation	60 %	全出席が大前提である。そのうえで授業中の発言等を考慮する。
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
216	経済学演習 (清水英彦)	通年	3年以上：4単位	清水 英彦 政政・経演・国演

副題
Subtitle

社会保障の理論的・実証的研究

授業概要
Course Description

わが国の社会保障制度は1980 - 90年代に大きな改革が行われた。その主な要因は財政危機と人口の少子高齢化であった。2000年代に入り、人口の少子高齢化はさらに進行し、80 - 90年代の大改革にもかかわらず、わが国の社会保障制度の財政的規模は今後一層拡大するものと予想される。このため、国民経済に及ぼす社会保障制度の経済的影響力もますます増大しようとしている。

そこで本研究では、このような社会保障の国民経済に対する経済的影響、とくに所得再分配、経済安定、経済成長等に及ぼす影響を理論および実証の両面から検討していくことにする。

授業の到達目標
Objectives

3年次：社会保障の基礎的知識の習得と卒業論文のテーマ決定と発表。
4年次：卒業論文の完成と提出。

授業計画
Course Schedule

第1回：イントロダクション
第2回 - 第10回：テキスト輪読・発表
第11回：ディベート（ゼミ合宿）
第12回 - 第13回：卒論テーマ発表・指導（ゼミ合宿）
第14回 - 第21回：4年卒論発表・指導（3・4年合同ゼミ）
第22回 - 第29回：3年卒論発表・指導
第30回：まとめと今後に向けての指導

教科書
Textbook(s)

最初のゼミにおいて指示する。

参考文献
Reference Book(s)

適宜指示する。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	レポート（論文）の完成度。
平常点評価 Class Participation	50 %	発表内容・発言の内容と頻度。ゼミ活動への参加度。
その他 Other	%	

備考
Note

3年次春学期に、「社会保障論」の講義を必ず受講すること。

関連URL
URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
217	経済学演習 (白木三秀)	通年	3年以上：4単位	白木 三秀 政政・経演・国演

副題
Subtitle 労働に関する国際比較研究

授業概要
Course Description 本演習では「21世紀の労働・仕事」に関する国際比較研究を行う。仕事・労働は人間社会が続く限り、未来永劫に続く研究課題である。
経済社会では現在、短期的のみならず中長期的にも様々な変化が起こっている。経済環境の変動にともなって、労働市場、職業構造、キャリア、仕事内容、労働者意識などが変わる。またこれに応じる形で、企業内の人的資源管理、政府の労働政策も変化しつつあるが、経済活動がグローバル化しているため、広い視野が必要とされている。本演習では、「現代における労働の国際比較」に的を絞って、それを掘り下げて検討していきたい。
企業訪問やディベートなども随時取り入れ、ゼミ生同士で切磋琢磨し、現実感覚や論理的思考能力の涵養も行いたい。

授業の到達目標
Objectives 日本企業が国際展開を加速する中で、人材や労働がどのようになっていくのかについて、個々人の見方や考え方をロジカル、かつデータに基づき述べられるようになることが、当面のゼミ活動の到達目標である。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第15回：テキストをグループで発表し、コメンテーターからコメントを受け、質疑に答える。
第16回 - 第18回：他大学とのディベートを行う。
第19回 - 第30回：テキストの報告、コメント、質疑を行うとともに、4年生の卒論の報告、質疑を行う。

教科書
Textbook(s) その都度、提示する。

参考文献
Reference Book(s) その都度、提示する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備考
Note 取得が望ましい科目：社会政策（白木担当）、労働経済学、統計学

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
218	経済学演習 (田中久稔)	通年	3年以上：4単位	田中 久稔 政政・経演・国演

副題
Subtitle

理論経済学を学ぶための数学的・統計学的な手法の習得

授業概要
Course Description

この演習では理論経済学を学ぶために必要となる、数学的・統計学的な手法を身につけることを目標としています。演習では、大学院レベルの書籍を一冊選び、ゼミでの議論を通じて完璧な理解を目指します。2011年度は、ラング「線形代数学(上)」(ちくま学芸文庫)を読んで数学的基礎を身に付けたうえで、ダレル・ダフィー「資産価格の理論」(創文社)を用いて、とくにファイナンス理論において線形代数がどのように活用されているのかを学びました。2012年度には、微分方程式と最適制御理論の基礎を学んだうえで、マクロ経済学への応用についてテキストを選んで学習します。

レポート作成に必要となるpLaTeXや、シミュレーション計算に用いる統計処理言語Rなどのプログラミング言語の習得も授業に並行して行います。

授業の到達目標
Objectives

1. 興味のある社会科学的現象の数理解モデル化ができるようになる。
2. 数理解モデルの数値分析をするためのプログラムが組めるようになる。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：発表者の順番割り振り。pLaTeXの簡単な解説。
 第2 - 6回：微分方程式の基礎
 第7 - 14回：最適制御理論の基礎
 第15回：前期のまとめと夏休みの課題の説明
 第16回：発表者の順番割り振り。Rのインストールと簡単な解説。
 第17 - 25回：マクロ経済学理論への応用
 第26 - 29回：数値計算入門
 第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

小山昭雄「ダイナミック・システム(下) (経済数学教室 8)」岩波書店

参考文献
Reference Book(s)

とくになし。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	夏休みの課題レポートを基準とする
平常点評価 Class Participation	50 %	ゼミ内での報告を重視する
その他 Other	%	

備考
Note

担当教員による経済数学Aを受講済みであれば前提となる知識は十分です。また経済理論や数学が苦手な学生であっても、チャレンジする意欲があるならおおいに歓迎します。

関連URL
URLs for References

<http://hstnk.txt-nifty.com/blog/>

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
219	経済学演習 (永田良)	通年	3年以上：4単位	永田 良 政政・経演・国演

副題
Subtitle

ミクロ経済学の行方を考える

授業概要
Course Description

ミクロ経済学は、近年、その内容に大きな変化が現われて来ている。それは従来のオーソドックスな部分均衡・一般均衡から成る理論体系に加えて、不確実性や情報の非対称性下での意志決定論とゲーム理論とから成る新たな分野が急速に発展・拡大し大きな一角を占めるに至っていることである。前者は経済社会における市場の働きに焦点がおかれるが、後者では、種々の現実的な条件の下での個人（あるいは個人対個人、組織対個人）の合理的経済行動に重点がおかれる。（比喩的に言えば、前者はミクロ・マクロ的理論、後者はミクロ・ミクロ的理論と言えるかもしれない。）現在では、これら2つの体系が2重構造を成してミクロ経済学を形作っているとさえ言える。このように短期間のうちに急激に変化しているミクロ経済学に対し、本演習では、旧来の体系と新たな体系を比較したり、新たな分野の内容に分け入ったりしてそのダイナミズムの源泉や行く末などを考えて見たいと思う。尚、受講者の関心によって重点の置き方を変える場合もある。

授業の到達目標
Objectives

ミクロの経済学の伝統的理論と新潮流の理論の両方に関し、その基礎を十分理解すると共に、両者の関係について各自がしっかりした見解を述べられるようになることを目標とする。

授業計画
Course Schedule

第1回：ミクロ経済学の歴史
第2回：ミクロ経済学の現状
第3回：伝統的ミクロ経済学の展望：特徴と問題点 - 15回まで
第4回 - 第6回：家計行動
第7回 - 第9回：企業行動
第10回 - 第13回：市場の理論（完全競争と不完全競争）
第14回 - 第15回：一般均衡理論
第16回：伝統的理論から新潮流へ
第17回：ゲーム理論の有効性
第18回：ワンショットゲーム
第19回：逐次ゲーム
第20回：くり返しゲーム
第21回：不完備情報ゲーム
第22回：ゲーム理論の応用
第23回 - 第27回：独占と寡占の理論
第28回：不確実性と情報の非対称性の重要性
第29回：保険市場
第30回：労働市場

教科書
Textbook(s)

奥野正寛（編著） ミクロ経済学 東京大学出版会 2008年

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考 Note	<p>ミクロ経済理論の研究という性格上、数学的知識は必要不可欠である。 受講者には、ミクロ経済学の履修に加えて、解析学・線形代数の十分な理解が要求される。</p>
-------------	---

関連URL URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
220	経済学演習 (中村慎一郎)	通年	3年以上：4単位	中村 慎一郎 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

産業エコロジー Industrial Ecology

授業概要
Course Description

企業経営、政府の政策立案、消費者行動において環境への配慮が無視できなくなっている。産業エコロジー (Industrial Ecology) は環境と経済活動との関わりを定量的・実務的に捉える分野であり、ISO化され多くの企業で採用されている製品環境影響評価手法であるLCA (ライフサイクルアセスメント)、資源循環を包括的・視覚的に捉える手法として広く使われているMFA (マテリアルフロー分析)、および製品のライフサイクル全体を通じた経済性評価手法であるLCC (ライフサイクル費用計算) を主な手法として含む。本演習の目的は、実社会において広く使われており、環境問題の深化と共に今後ますますその重要性を増すであろうこれらの手法を正しく理解し、実際に応用できるようになることである。

ここにおける重要なキーワードは生産・使用・廃棄から成る製品ライフサイクルである。環境問題はシステム全体に関わることであるので、相互依存関係を対象とする経済学の観点には役に立つものが少なくない。しかし、従来の経済学では使用・廃棄段階の問題を明示的に扱うことが極めて少なかった。たとえば、廃棄物は生産・消費に伴い必ず発生するが、標準的ミクロ経済学では廃棄物の記述が無い。

本演習は、諸君の経済学知識を最大限生かしつつ、産業生態学的な視点の涵養に勤める。産業生態学が対象とする現実の環境問題においては技術的・制度的側面が重要であるので、分析道具として用いる産業連関分析・回帰分析の他にこれも学習する。

参考書・その他の準備については、研究室ホームページ

<http://www.f.waseda.jp/nakashin/index-j.html>

で通知する。

キーワード：製品ライフサイクル、LCA、LCC、MFA、環境効率、持続可能な生産と消費

授業の
到達目標
Objectives

LCAの結果を解釈できる、計算過程を理解できる、様になる事。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：IE入門
- 第2回：製品ライフサイクル1
- 第3回：製品ライフサイクル2
- 第4回：製品ライフサイクル3
- 第5回：製品ライフサイクル4
- 第6回：廃棄物と廃棄物処理1
- 第7回：廃棄物と廃棄物処理2
- 第8回：廃棄物と廃棄物処理3
- 第9回：廃棄物と廃棄物処理4
- 第10回：LCA 1
- 第11回：LCA 2
- 第12回：LCA 3
- 第13回：LCA 4
- 第14回：LCA 5
- 第15回：LCC 1
- 第16回：LCC 2
- 第17回：LCC 3
- 第18回：LCC 4
- 第19回：LCC 5
- 第20回：MFA 1
- 第21回：MFA 2
- 第22回：MFA 3
- 第23回：MFA 4
- 第24回：MFA 5
- 第25回：応用事例研究 1
- 第26回：応用事例研究 2
- 第27回：応用事例研究 3
- 第28回：応用事例研究 4

第29回：応用事例研究 5

第30回：IE総括

教科書
Textbook(s)

田中 勝「廃棄物学概論」丸善
監修 稲葉 敦「LCAの実務」社団法人 産業環境管理協会
中村慎一郎「エクセルで学ぶ産業連関分析」エコノミスト社

参考文献
Reference Book(s)

田中 勝「廃棄物学概論」丸善
松藤敏彦「リサイクルと環境」三共出版

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	ゼミ人の参加度による。
その他 Other	%	

備考
Note

環境分野は日進月歩の世界である。演習においては教科書の情報が陳腐化している可能性が少なくないので、webなどから最新情報を入手することが必要である。留意されたい。

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/nakashin/index-j.html>

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
221	経済学演習 (南部宣行)	秋学期 (週2回)	3年以上：4単位	南部 宣行 政政・経演・国演

副題
Subtitle 近代イギリス社会経済史

授業概要
Course Description 18世紀中葉以降におけるイギリスの経済ならびに社会に関する諸問題を検討する。履修者各自のテーマは、産業革命期、およびそれ以降、第1次大戦に至る時期に関するものであることが最も望ましい。しかし、現代とのかかわりにも強く関心をもっており、上述の主要テーマの範囲内であるならば、それ以降の時期、あるいは現代の諸問題、例えば、「イギリス病」、EU加盟、失業等の諸問題であっても構わない。これらのテーマの選択は各自の自由に任されている。各自の報告を重視しているので、すでにテーマが定められており、明確な問題意識をもっている履修生を望んでいる。

授業の到達目標
Objectives 演習論文の作成(各自)。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第2回：論文作成指導 - 基本的構成、様式、体裁、具体例等 -
第3回 - 第4回：履修生の課題に参考となるような一般的な文献の紹介
第5回 - 第13回：履修生の課題に関連する文献の講読
第14回 - 第15回：論文作成進捗報告書に基づく、履修生に対する個別面接
第16回 - 第17回：履修生の課題に参考となるような文献の紹介
第18回 - 第24回：履修生各自の個別課題に関連する文献の講読
第25回 - 第28回：履修生各自による研究経過報告
第29回 - 第30回：論文作成進捗報告書に基づく、履修生に対する個別面接

教科書
Textbook(s) とくにはない。

参考文献
Reference Book(s) 履修生各自のテーマに沿った関連文献を紹介。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	80 %	
平常点評価 Class Participation	20 %	
その他 Other	%	

備考
Note 関連科目：「西洋経済史」、「経済史入門」等の講義をすでにあるいは併行して履修していることが望ましい。
その他：サブ・ゼミや合宿等、正規授業時間以外の活動にも、可能な限り応ずる用意があるので、積極的な履修者を求めている。

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
2 2 2	経済学演習 (野口和也)	通年	3年以上：4単位	野口 和也 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

経済分析と統計的方法

授業概要
Course Description

経済分析と統計的方法 講義内容：現代社会は情報化の時代であるといわれている。このような時代においては、統計データとして与えられた情報をどのようにして解釈・分析し、その結果をもとにして新たな情報を提供するためには、どのような方法によれば良いかを考える必要がある。

授業の
到達目標
Objectives

データの収集および分析を自分で実行できるようにする。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：1年間の方針と授業計画について
- 第2回 - 第3回：統計学の基本的知識の復習 1
- 第4回：統計データの視覚的表現 1
- 第5回：統計データの視覚的表現 2
- 第6回：モーメント・標準化など
- 第7回：統計的関係の分析 1
- 第8回：統計的関係の分析 2
- 第9回：簡単なモデルによる推計と予測 1
- 第10回：簡単なモデルによる推計と予測 2
- 第11回：ノンパラメトリックな問題
- 第12回：確率分布とシミュレーション 1
- 第13回：確率分布とシミュレーション 2
- 第14回：タームペーパーの作成計画について
- 第15回：各自のタームペーパー計画の発表
- 第16回：多変量解析 1
- 第17回：多変量解析 2
- 第18回：多変量解析 3
- 第19回：多変量解析 4
- 第20回：多変量解析 5
- 第21回：時系列分析 1
- 第22回：時系列分析 2
- 第23回：タームペーパーに関するデータのスクリーニング
- 第24回：タームペーパーに関する報告 1
- 第25回：タームペーパーに関する報告 2
- 第26回：タームペーパーに関する報告 3
- 第27回：タームペーパーに関する報告 4
- 第28回：問題点と修正点に関する討論
- 第29回：計算手法の検討
- 第30回：最終報告と修正点の検討

教科書
Textbook(s)

未定。

参考文献
Reference Book(s)

演習中に指示。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	データ分析の習得度とまとめ方を評価する。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席・報告などによる。
その他 Other	%	

備 考 Note	<p>応募条件として、「統計学」をすでに履修済みか、3年春学期に履修予定であること。 コンピュータにかんしてはまったくの初心者であっても良いが、少なくとも興味を持っていること。</p>
-------------	--

関連URL URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
223	経済学演習 (馬場義久)	通年	3年以上：4単位	馬場 義久 政政・経演・国演

副題
Subtitle
わが国の財政システムに関する研究

授業概要
Course Description
ゼミナールの共通テーマとしては、現行日本の財政システムに関する研究を行う。たとえば、税制の問題点と改革の方向、財政赤字分析、年金・医療・福祉など社会保障のあり方、地方分権制度の構築などが課題として挙げられる。6月末まで財政学のテキストを皆で輪読し、その後、3ないし4のグループに分かれ研究を進めグループ論文を作成する。ゼミナールであるので、独習だけでなく自由闊達な討論を通じてお互いに良い刺激を与えながら、これらの研究をすすめたい。ゼミ活動を通じて、自分なりに財政問題を考えるセンスを身に付けてもらいたいと思っている。

授業の到達目標
Objectives
解明すべき財政問題を発見し、それに関する重要文献を理解し、自らの主張をまとめる能力を養成する。

授業計画
Course Schedule
第1回：イントロダクション ゼミ活動の年間予定確認
第2回 - 第7回：教科書第10章「社会保障を考える」を輪読予定
第8回 - 第13回：教科書第7章「地方税を徴収される」を輪読予定
第14回：グループ研究第1班および第2班の研究報告
第15回：グループ研究第3班および第4班の研究報告
第16回：グループ論文の書き方の指導および日程の打ち合わせ
第17回 - 第29回：グループ研究の報告（各回1グループずつ）
第30回：グループ論文の執筆上の再確認

教科書
Textbook(s)
横山・馬場・堀場『現代財政学』有斐閣 2009。

参考文献
Reference Book(s)
ゼミナールの開始時に参考文献リストを配布するほか、授業中に適宜紹介する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	グループ論文の説得力・独自性をもとに評価。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席、討論への参加、報告内容をもとに評価。
その他 Other	%	

備考
Note
() ゼミ活動に前向きな諸君を特に歓迎したい。
() 財政学を現在履修中か、3年次春学期に履修することを求める。

関連URL
URLs for References
なし。

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
224	経済学演習 (藤森頼明)	通年	3年以上：4単位	藤森 頼明 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

資本理論の総合的研究 - 経済構造の現在と未来

授業概要
Course Description

生産と分配を巡る問題の研究を課題とする。
最近の世界恐慌の事態は、市場行動を基礎とする経済理論の失敗をも意味している。これに対し、経済を構造の側面から分析する理論として、Marx的な経済理論がある。本演習では、Marxの発想を基礎として、現代経済をより深く理解すると共に、経済の未来像を議論することを大きな目標とする。
Marxの理論は、価格理論、成長理論、経済循環論、恐慌論、その他、広範囲に及ぶものであるけれども、それを経済構造に基礎をおく理論と捉えれば、想像以上に統計データ等との親和性も高く、現代の経済をより深く理解するのに有効である。
演習では、区切りの良い箇所を、随時小論文等の作成指導を行う。

授業の
到達目標
Objectives

「標準的経済学では経済現象を説明できない事」ヲ認識スル。
「Marx経済学の大枠」ヲ理解スル。

授業計画
Course Schedule

第1回：導入
第2回 - 第10回：経済理論の議論に必要な基礎数学の演習。
第11回 - 第29回：経済理論の基本図書を選択して輪読。基礎数学等の復習を随時含む。
第30回：要約

教科書
Textbook(s)

最近、数年間で取上げたものは、J・ソロス『グローバル資本主義の危機』、幸島祥夫『バランスシートによる日本経済分析』、浜田浩児『93SNAの基礎』、等がある。2005年度はD・K・フォーリー『成長と分配』を使用している。2006年度は日本経済の産業関連表を用いた分析をテーマとした。その他、微分方程式の応用、線形代数の応用に関連する入門水準の参考書を使用した。

参考文献
Reference Book(s)

開講時に指示する。下記関連URLをも参照の事。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考
Note

ゼミナールの概要については、関連URLの該当箇所をも参照の事。

関連URL
URLs for References

<http://www.fujimori.cache.waseda.ac.jp>

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
225	経済学演習 (船木由喜彦)	通年	3年以上：4単位	船木 由喜彦 政政・経演・国演

副題
Subtitle

ゲーム理論と実験経済学

授業概要
Course Description

この演習では「ゲーム理論」の基礎を修得すること、また、「経済学実験」を実施・分析する基礎能力を修得すること目標とします。さらに、それに関連する経済学・政治学諸分野の問題を研究します。例えば環境問題、情報の経済学、産業組織論、公共財供給問題などがそれらの研究テーマの一例となります。

ゲーム理論では、互いに依存関係のある状況における、個人の合理的な意思決定や行動を研究します。実験経済学では、ゲーム理論や経済学の理論のとおりになんが行動するのか、もし、そうでないとすると、それはなぜかという問題を研究します。

ゼミでは2年間かけて、自分の定めた研究テーマの卒業論文を作成し、それを卒業発表会で報告します。3年次では、このための基礎研究をします。まずは、担当教員の推薦するゲーム理論あるいは実験経済学の平易なテキストまたは資料を輪読することから始める予定です。その際、実際にゼミの皆さんに参加していただき、人々の行動選択の実験を実施し、実験経済学をより理解していただく予定です。卒業論文のテーマとしては上記のほか、実際に実験を実施した研究、国際政治経済的な研究、スポーツのゲーム理論分析、制度の比較研究、混雑の解消の問題など内容は多岐にわたりますが、そのほとんどがゲーム理論に関連した研究です。その中には論文コンクールにおいて優秀賞を受賞したものもあります。なお、卒業論文の内容は卒論発表会にて報告しますが、0Bや2年生の参加もあります。例年、1 - 2割の学生が大学院に進学します。

なお、3年修了時にはその年に学んだことを求めたレポートを作成していただきます。

授業の到達目標
Objectives

ゲーム理論の基礎知識の確実な修得、経済学実験実施・分析能力の修得、さらにそれらを踏まえた応用力の養成。

授業計画
Course Schedule

第1回：自己紹介、テキスト選定
第2回 - 第20回：テキスト輪読、経済学実験実習
第21回 - 第24回：卒論テーマ設定（議論と面接）
第25回 - 第26回：卒論研究に向けての報告と議論、3年次レポートの作成
第27回 - 第28回：4年生の卒論に対する討論、3年次レポートの作成
第29回：卒論発表会（4年生）と討論会
第30回：今後研究計画の報告、3年次レポートの提出

教科書
Textbook(s)

担当教員の配付する資料またはテキストを用いる。

参考文献
Reference Book(s)

船木由喜彦『ゲーム理論講義』（新世社・近刊）
中山、武藤、船木編著『ゲーム理論で解く』（有斐閣）
武藤滋夫『ゲーム理論入門』（日経文庫）
佐々木宏夫『入門ゲーム理論』（日本評論社）
梶井厚志『戦略的思考の技術』（中公新書）
船木由喜彦『演習ゲーム理論』（新世社）
岡田 章『ゲーム理論・入門』（有斐閣アルマ）
河野、西條編『社会科学の実験アプローチ』（勁草書房）
川越敏司『行動ゲーム理論入門』（NTT出版）
フリードマン・サンダー『実験経済学の原理と方法』（川越ほか訳・同文社）

評価方法 Evaluation		割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
	試験 Examination(s)	%	
	レポート Report(s)	20 %	3年次終了レポート
	平常点評価 Class Participation	80 %	報告、レジュメ、議論、出席。
	その他 Other	%	

備 考
Note

学生に対する要望：「受講希望学生に対する掲示」を良く読んでください。

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/funaki/wasyoko.html>

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
226	経済学演習 (堀内俊洋)	通年	3年以上：4単位	堀内 俊洋 政政・経演・国演

副題
Subtitle 企業、産業、経済、そしてドラッカー研究

授業概要
Course Description この演習では、生産、供給活動を担っている企業、そしてその集計といえる産業という切り口から経済現象を勉強する事を目的とする。企業活動といえば、主に経営学で考察されるものであるが、経済学の観点からも取り上げるわけである。関心はミクロ的で、応用ミクロ経済学の一つである産業組織論を経済学のベースとする。具体的には、そのような問題意識から、各人が、経営学者ドラッカーの古典的な名著の勉強に取り組む。多くの翻訳書が出版されているはずであるので、原著と照らし合わせながら勉強に取り組み、自分の力で思考する訓練をしてもらいたい。この3年時における各人の成果を4年の卒論に反映、産業組織論とドラッカー研究の総合化を演習で目指して欲しい。

授業の到達目標
Objectives ドラッカーを理解した上で、自分なりの考えを持つことが出来ることがこの演習の目標。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第5回：ドラッカー研究のねらい、対象、アプローチなどを解説。1年間の研究の方向性を討議
第6回 - 第10回：ドラッカーの各著書の研究発表、その1
第11回 - 第15回：ドラッカーの各著書の研究発表、その2
第16回 - 第20回：ドラッカーの各著書及び各自の独自の研究発表、その3
第21回 - 第25回：ドラッカーの各著書及び各自の独自の研究発表、その4
第26回 - 第30回：ドラッカーの各著書及び各自の独自の研究発表、その5、および1年間の取りまとめ

教科書
Textbook(s) とくになし。各自が選んだドラッカーの著作をいわば各自の教科書とする。

参考文献
Reference Book(s) ドラッカーの関連書物。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	ゼミ調査目的に沿っていることが合格レベル。
平常点評価 Class Participation	50 %	同上。
その他 Other	20 %	ゼミの勉強に全体的にかかわる協調性を評価。

備考
Note

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
227	経済学演習 (松本保美)	通年	3年以上：4単位	松本 保美 政政・経演・国演

副題
Subtitle

経済分析のための基礎理論・手法の研究

授業概要
Course Description

(1) 計量分析のための理論と分析手法、(2) 集団的選択理論をそれぞれ1年間ずつ交互に研究する。
 (1) では、GujaratiのBasic Econometrics (4th ed.) に従い、計量経済モデルの構築に必要な基礎的統計理論・分析手法・検定手法を学ぶ。
 (2) では、まず、Arrowの一般可能性定理とその関連定理を学ぶ。特に、理論的枠組みと賦課される諸条件、および、結果の現実的な意味を解き明かすことに重点を置く。解釈に当たっては、進化生物学の成果をできるだけ取り入れる努力を行う。

授業の到達目標
Objectives

* 自分で計量分析が出来るようになる。
 * Arrowの一般可能性定理のvariationをつくり、証明出来るようになる。

授業計画
Course Schedule

(1) 西暦偶数年(3、4年合同)
 第1回 - 第4回: Two Variable Regression Model
 第5回: Classical Normal Linear Regression Model
 第6回: Interval Estimation and Hypothesis Testing
 第7回 - 第10回: Multiple Regression Analysis
 第11回: Dummy Variables
 第12回 - 第15回: Multicollinearity, Heteroscedasticity and Autocorrelation
 第16回 - 第20回: Model Making (Student's Exercise 1)
 第21回 - 第25回: Exercise Review and Additional Lesson on Data Handling
 第26回 - 第30回: Final Model Making (Student's Exercise 2)
 (2) 西暦奇数年(3、4年合同)
 第1回 - 第2回: Introduction
 第3回 - 第4回: Simple Majority Decision
 第5回 - 第6回: Choice Functions
 第7回 - 第11回: Arrow's General Possibility Theorem
 第12回 - 第20回: Functional Collective Choice
 第21回 - 第25回: Students' Exercise
 第26回 - 第28回: Irrational Individual Preference Relations
 第29回 - 第30回: Dynamic Collective Choice

教科書
Textbook(s)

(1) Gujarati, D., Basic Econometrics, 4th ed., McGraw-Hill, 2003
 (2) Sen, A.K., Collective Choice and Social Welfare, North-Holland, 1970
 Sober, E. ed., Conceptual Issues in Evolutionary Biology, 3rd. ed. MIT Press, 2006

参考文献
Reference Book(s)

上記(1)、(2)および進化生物学に関する文献は演習中に適宜紹介する。

評価方法 Evaluation		割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
	試験 Examination(s)	%	
	レポート Report(s)	80 %	学術論文の形式・評価に準拠。
	平常点評価 Class Participation	20 %	プレゼンテーションの内容と質問に対する答え方。
	その他 Other	%	

備 考 Note	
	<p>学生に対する要望：応募時点での成績は問わない。積極的に、かつ、粘り強く学ぶ意志のある学生であれば良い。</p> <p>注意：本演習は3年、4年合同である。したがって、2時限連続になるので、他の科目の履習に注意するように。</p>

関連URL URLs for References

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
228	経済学演習 (村上由紀子)	通年	3年以上：4単位	村上 由紀子 政政・経演・国演

副題
Subtitle 労働と勤労者の生活に関する研究

授業概要
Course Description 多くの人は、学校教育を終えたあと、労働力を供給して所得をもらい生活をしている。社会人となったあとも、さらに自分に教育投資をする人もいる。また、社会保障の諸制度は勤労者生活をサポートしている。本演習では、労働を中心として、教育、消費、医療、社会保障などの勤労者の生活に直接関連する課題を取り上げ、それらに関する実態の解明、問題の把握、問題解決のための政策などについて、理論的・実証的に研究する。

本演習は主に二つの部分から構成されている。第一の柱はグループ研究である。今年のグループ研究の共通テーマは「所得格差」であり、3 - 5人から成るグループごとにサブテーマを定めて研究を行う。研究の成果は口頭のプレゼンテーションと論文により発表する。第二の柱は4年次の卒業論文のテーマを決定することである。そのために、労働、教育、消費、医療、社会保障などに関する文献の輪読、ディスカッション、ディベートなどを行う。

授業の到達目標
Objectives グループ研究を行うことを通じて、研究のやり方や発表（口頭、論文）の仕方を修得する。
また、様々な研究課題に触れながら、4年次に個人で取り組む卒業論文の研究課題を見つけ、計画をたてる。

授業計画
Course Schedule 第1回：イントロダクション
第2回 - 第14回：所得格差に関する研究
第15回：グループ研究計画の発表
第16回：教育
第17回：医療
第18回：賃金
第19回：消費
第20回：失業
第21回：社会保障
第22回：ワークライフバランス
第23回：労働移動
第24回：若年者の雇用
第25回：女性労働
第26回：技術革新と雇用
第27回 - 第28回：グループ研究発表
第29回 - 第30回：卒業論文計画発表

教科書
Textbook(s) 授業中に指示する。

参考文献
Reference Book(s) 授業中に指示する。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	20 %	
平常点評価 Class Participation	30 %	
その他 Other	50 %	グループ研究の成果、取組み。

備 考
Note

ゼミへの参加は2012年度開講の労働経済学を履修することを前提とする。

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/myukieco/>

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
229	経済学演習 (本野英一)	通年	3年以上：4単位	本野 英一 政政・経演・国演

副題
Subtitle アジア専制国家文明の理論的把握

授業概要
Course Description 古代から現代に到るアジア専制主義国家文明の本質を把握し、現在の中国・インド・イスラム諸国の動向への理解を深めるようにする。

授業の到達目標
Objectives 現在のアジア大陸諸国社会が、西洋諸国の制度を採用しながらも、その本質に変わらないということを理解できるようになること。

授業計画
Course Schedule
第1回：オリエンテーション(1)
第2回 - 第12回：テキスト輪読
第13回：全体討論(1)
第14回：全体討論(2)
第15回：夏合宿準備
第16回 - 第27回：テキスト輪読
第28回：全体討論(1)
第29回：全体討論(2)
第30回：ゼミ論計画発表会

教科書
Textbook(s) カール・A・ウィットフォーゲル(湯浅赴男訳)『オリエンタル・デスポティズム - 専制官僚国家の生成と崩壊 - 』(新評論 1991、新装版1995年)

参考文献
Reference Book(s) 湯浅赴男『「東洋的専制主義」論の今日性：還ってきたウィットフォーゲル』(新評論2007年)
石井知章『K・A・ウィットフォーゲルの東洋的社会論』(社会評論社 2008年)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	60 %	
平常点評価 Class Participation	30 %	輪読の準備の出来。
その他 Other	10 %	合宿報告の準備の出来。

備考
Note 原則としてアジア経済史、経済史入門Bのいずれかの単位を取得済みか、もしくは現在受講中の学生の参加を優先する。

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
230	経済学演習 (若田部昌澄)	通年	3年以上：4単位	若田部 昌澄 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

経済問題を解くための経済学

授業概要
Course Description

この演習では、二つのことを目的としている。第一に、「経済問題」をとりあげること、経済学の実践的な部分の知識と興味を開拓することである。道具の良し悪しは実際に使ってみることでよくわかるし、使う側の理解も高まる。しかし、そのためには経済学についても相当の勉強が必要になる。第二に、経済についてのメディアなどに流布している各種の「誤解」を「躓きの石」と名付け、これを意識的に取り上げ、取り除くことを試みる。

実際の講義では、経済問題について各種メディアでいわれている議論を概観し、必要な経済学の知識を確認し、それに基づいて結論を出していくという形をとる。また、良質な英語記事を読むことを習慣としたい。

英語の文献も利用するので、英語に苦手意識がある人はご遠慮ください。

授業の
到達目標
Objectives

(1) 論理的思考力の向上、(2) 標準的な経済学の学習、とくにその現実への応用についての能力開発、(3) 口頭での発表能力の開発、(4) 課題や修了論文を通じて文章を書く能力の向上。

授業計画
Course Schedule

第1回：イントロダクション：議論の組み立て方について
第2回：論理トレーニング1
第3回：論理トレーニング2
第4回：論理トレーニング3
第5回：論理トレーニング4（ディベート）
第6回：経済をみる躓きの石1：経済と経営は違う
第7回 - 第9回：経済をみる躓きの石2：財政危機
第10回 - 第12回：経済をみる躓きの石3：社会保障
第13回 - 第15回：経済をみる躓きの石4：マクロ経済政策
第16回 - 第18回：経済をみる躓きの石5：為替
第19回 - 第21回：経済をみる躓きの石6：貿易
第22回：ゼミ修了論文計画書発表1
第23回：ゼミ修了論文計画書発表2
第24回：ゼミ修了論文計画書発表3
第25回：ゼミ修了論文発表1
第26回：ゼミ修了論文発表2
第27回：ゼミ修了論文発表3
第28回：ゼミ修了論文発表4
第29回：まとめ
第30回：ゼミの終りにあたって

教科書
Textbook(s)

飯田泰之『ダメな議論』ちくま新書、2004年。
野矢茂樹『<新版>論理トレーニング』産業図書、2007年。
ポール・クルーグマン『良い経済学 悪い経済学』日経ビジネス人文庫、2000年。
盛山和夫『経済成長は不可能なのか』中公新書、2011年。
西沢和彦『税と社会保障の抜本改革』日本経済新聞出版社、2011年。
岩田規久男『デフレと超円高』講談社現代新書、2011年。
片岡剛士『日本の「失われた20年」』藤原書店、2010年。
Reinhart, Carmen, and Kenneth Rogoff, This Time is Different: Eight Centuries of Financial Folly, Princeton: Princeton University Press, 2009. (『国家は破綻する』日経BP社、2011年)

* 変更する可能性あり。

参考文献
Reference Book(s)

若田部昌澄 『経済学者たちの闘い』東洋経済新報社、2003年。
 若田部昌澄 『改革の経済学』ダイヤモンド社、2005年。
 若田部昌澄 『危機の経済政策』日本評論社、2009年。
 浜田宏一・若田部昌澄・勝間和代 『伝説の教授に聞け!』東洋経済新報社、2010年。
 若田部昌澄・栗原裕一郎 「よりよく生きるための経済学」Webちくまで連載中。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	修了論文の量(2万字以上)と質(問題設定の適切さ、論旨の妥当性)。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席は単位取得の前提。無断欠席はゼミ脱退とみなす。
その他 Other	%	

備考
Note

- 学生に対する要望：
- ・ミクロ経済学、マクロ経済学、計量分析、計量経済学を履修済みか履修中であることが望ましい。
 - ・選考にあたっては課題を出すことがあるので掲示板に注意するように。
 - ・講師が何者か、その考え方を知らない人は、参考文献を読むこと。
 - ・演習が始まるまでにミクロ経済学、マクロ経済学の復習をしてもらう。
 - ・演習については無断欠席をしないこと。無断欠席はゼミ脱退とみなす。
 - ・演習を優先すること。
 - ・演習時間を延長することがありうるので、ゼミの後に用事を入れないこと。
 - ・夏合宿に参加できること。
 - ・本代を気にせずに購入すること(必要ならば本の購入代は貸す)。
 - ・英語に対する苦手意識をもたないこと。
 - ・さらに演習について質問がある場合は、メール、オフィスアワーを利用してください。

関連URL
URLs for References

経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
231	経済学演習 (渡会勝義)	通年	3年以上：4単位	渡会 勝義 政政・経演・国演

副題
Subtitle 経済学における富と貧困、幸福

授業概要
Course Description 経済学の歴史において富の発展と貧困（とくに失業）の問題は、中心的な位置を占めてきた。しかし最近では富の増加が幸福の増加をもたらすか否かが問題となっている。本演習では富の増加、貧困、幸福の関連について考察する。

授業の到達目標
Objectives 問題を自分で発見し解決をはかる能力を身に付けること。内容のある英語を正確に理解できるようにすること。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第29回：上記テーマに関する文献（基本的に英語）を読み、議論をする。
第30回：まとめ。各自上記テーマで考察したことをまとめる。（レポートの提出）

教科書
Textbook(s)

参考文献
Reference Book(s) 随時紹介する。

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備考
Note 関連科目：経済学史（渡会）（本演習のテーマに密接に関連する講義）
学生に対する要望：現代の問題意識をもって経済学の文献を読む意欲のある諸君の参加を希望します。また内容のある英語を読解する能力を身につけたいと考える人も歓迎します。

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
301	国際政治経済学演習 (秋葉弘哉)	秋学期 (週2回)	3年以上：4単位	秋葉 弘哉 政政・経演・国演

副題
Subtitle 開放マクロ経済学 (国際金融論)

授業概要
Course Description 現代の経済は、国際化とともにますますその相互依存関係を深めている。その依存関係は、モノ、ヒト、カネのいずれの側面でも今後さらに深まるものと考えられる。本演習では、特にカネを通じた国際的な相互依存関係を、一昔前の「国際金融論」、現代風にいえば「開放マクロ経済学」をつうじて、主として理論的に解明する。しかし同時に、理論的な帰結は実証的な側面から検証する必要がある、時間の許す限り、また受講生の基礎的な統計学の知識と計量分析能力に応じて、計量経済学からのアプローチにも注目する。

授業の到達目標
Objectives 開放マクロ経済学の習得。

授業計画
Course Schedule 第1回：通年計画及び春期計画の説明等
第2回 - 第4回：テキスト第2章
第5回 - 第7回：テキスト第3章
第8回 - 第10回：テキスト第4章
第11回 - 第13回：テキスト第5章
第14回 - 第15回：テキスト第6章
第16回：秋期計画の確認等
第17回 - 第19回：テキスト第7章
第20回 - 第22回：テキスト第8章
第23回 - 第25回：テキスト第9章
第26回 - 第28回：テキスト第10章
第29回 - 第30回：テキスト第11章

教科書
Textbook(s) バード「国際マクロ経済学」文真堂、2001年

参考文献
Reference Book(s) 秋葉弘哉「国際経済学」ミネルヴァ書房、2010年

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	開放マクロ経済学の理解度。
平常点評価 Class Participation	50 %	出席・報告・参加態度。
その他 Other	%	

備考
Note 前提科目：ミクロ経済学入門・マクロ経済学入門 (国際政経学科生のみ)
* 統計学入門
* 統計学入門については、履修済みであることが望ましい。
関連科目：金融論、国際貿易理論、国際金融理論、統計学、計量分析、計量経済学 (、)

関連URL
URLs for References

なし。

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
302	国際政治経済学演習 (久保慶一)	通年	3年以上：4単位	久保 慶一 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

現代世界の民族紛争と平和構築

授業概要
Course Description

本演習では、現代世界を揺るがしつづける民族紛争と紛争後平和構築について、理論と事例の双方を学ぶ。民族紛争はなぜ起こるのか。民族間の対立はどのように解決すればよいのか。多民族が平和的に共存するにはどうすればよいのか。紛争後の平和構築はどのように進めていけばよいのか。そこで国連などの国際機関はどのような役割を果たすべきなのか。本演習ではまずこれらの問題を考えるための理論的な文献を読み進めながら、世界各地の事例についても少しずつ学んでいきたい。演習では事前に各回のディスカッションのテーマを設定し、購読した文献を踏まえたディスカッションを行うことで、多面的に分析・評価する力や批判的思考力を養いたい。こうした購読や議論を通じて各自が関心を寄せる研究テーマを選択し、では、資料の収集と分析にもとづいた研究発表を行い、議論を通じて理論と事例双方の理解を深めていく。分析対象は先進国、旧ソ連・東欧、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどいずれの地域・国でもよいが、外国の政治・社会・歴史・文化に強い関心を持ち、積極的に議論に参加する人を希望する。

授業の
到達目標
Objectives

本演習は、民族紛争と紛争後平和構築に関する基礎的な諸理論についての理解を得ることを目標とする。また、あわせて、世界各地の紛争や平和構築の具体的事例についても学んでいくことを目指したい。こうした理論と事例の理解をもとに、参加者各自が研究テーマを設定して資料収集や文献購読を進め、翌年度末の卒業論文提出に向けた基礎的な作業に着手することが演習初年度（ ）の目標である。

授業計画
Course Schedule

第1回：春学期イントロダクション
第2回 - 第3回：文献購読1 - 民族アイデンティティの起源（アンダーソン『想像の共同体』）
第4回 - 第5回：文献購読2 - 現代の民族紛争の特徴（カルドー『新戦争論』）
第6回 - 第7回：文献購読3 - 現代の紛争と経済（コリアー『最底辺の10億人』）
第8回 - 第9回：文献購読4 - テロの政治・経済的諸要因（クルーガー『人はなぜテロリストになるのか』）
第10回：論文購読1 - 人道的介入（千知岩「人道的介入と保護する責任論」ほか）
第11回：論文購読2 - 紛争後平和構築と国連（上杉「国連統合ミッションの人道的ジレンマ」ほか）
第12回：論文購読3 - 平和構築におけるDDR（瀬谷「平和構築におけるDDRの成果、限界と今後の役割」ほか）
第13回：論文購読4 - 平和構築における移行期正義（望月「移行期正義における国際的な刑事裁判所の役割」ほか）
第14回：論文購読5 - 平和構築、人間の安全保障と教育（水野「平和構築のための教育協力」ほか）
第15回：理解度の確認
第16回：秋学期イントロダクション
第17回 - 第20回：論文購読（ゼミ生の研究テーマをもとに購読する論文を選択）
第21回 - 第29回：各自の研究成果の中間発表
第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

必要に応じ、指示する。

参考文献
Reference Book(s)

必要に応じ、指示する。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	40 %	秋学期末提出のタームペーパーをもとに評価します。
平常点評価 Class Participation	60 %	出席、プレゼンテーション、議論への貢献度、その他の要素を総合的に評価します。
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
303	国際政治経済学演習 (小西秀樹)	通年	3年以上：4単位	小西 秀樹 政政・経演・国演

副題
Subtitle

公共選択の経済分析

授業概要
Course Description

政治学と経済学の学際領域としての政治経済学は近年、ゲーム理論を用いた精緻なモデル分析とパネルデータを利用した厳密な実証分析の導入によって大きく様変わりしつつある。本演習では、政治的アクター（政治家、有権者、利益集団、官僚など）による政策選択と市場経済との相互依存関係を考慮しながら、政策はどのように決まるのか、なぜその政策は採用されたのか、政策決定に関わる制度をどのように構築するのが望ましいのか、といった論点について理論と実証の両面から考察し、ゼミ生の間で議論することを目的とする。

授業の到達目標
Objectives

経済理論やゲーム理論にもとづいて論理的に議論を展開できるようになること、計量経済学の基礎を身につけ、データを分析するコンピュータ技術を身につけること。

授業計画
Course Schedule

詳細は小西研究室のホームページを参照のこと
 演習：第1回 - 第30回 ゲーム理論と計量経済学の基礎を学習
 演習：第1回 - 第15回 政治経済学の文献を輪読
 第16回 - 第30回 研究成果の発表

教科書
Textbook(s)

Gibbons, R., GAME THEORY FOR APPLIED ECONOMISTS, Princeton University Press (邦訳：福岡、須田訳、「経済学のためのゲーム理論入門」、創文社)
 Woolderidge, J.M., INTORDUCTORY ECONOMETRICS: A MODERN APPROACH, Thomson, South-Western (邦訳なし)

参考文献
Reference Book(s)

小西秀樹「公共選択の経済分析」東京大学出版会
 松浦寿幸著「Stataによるデータ分析入門」東京書籍

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	
その他 Other	%	

備考
Note

演習募集に関する詳細な情報については、小西研究室のホームページで「演習募集」のコーナーを参照してください。

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/h.konishi/index.html>

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
304	国際政治経済学演習 (斎藤純一)	通年	3年以上：4単位	斎藤 純一 政政・経演・国演

副題
Subtitle

近現代の政治理論

授業概要
Course Description

このゼミでは、自由、公共性、社会保障、社会統合、デモクラシーなど近現代の規範的な政治理論の主要テーマを取り上げる。今年度は、とくにハーバーマスおよびロールズ思想に焦点を当てる予定である。

現代の政治社会を適切に理解するための言葉(概念)を獲得するとともに、これまで自明とされてきた規範や考え方を問い直す視点を身につけることがこのゼミの目標である。

授業の到達目標
Objectives

政治理論の基本的なテキストを正確に理解し、議論を整理して考え、理由(論拠)を明確に挙げながら自分の考えを伝える力を獲得することがこのゼミの到達目標である。とくに、論文指導等、文章力を伸ばすための機会をできるだけ設けたいと考えている。

授業計画
Course Schedule

第1回：ハーバーマスについてのイントロダクション

第2回 - 第11回：ハーバーマスの思想

第12回：検討と評価(レポートをめぐる議論)

第13回 - 第14回：検討と評価

第15回：まとめ

第16回：ロールズについてのイントロダクション

第17回 - 第26回：ロールズ思想

第27回：検討と評価(レポートをめぐる議論)

第28回 - 第29回：検討と評価

第30回：まとめ

教科書
Textbook(s)

ハーバーマス 『事実性と妥当』およびロールズ 『正義論』
ほか受講生と相談の上で決める。

参考文献
Reference Book(s)

斎藤純一 『公共性』(岩波書店、2000年)。

斎藤純一 『自由』(岩波書店、2005年)。

斎藤純一 『政治と複数性 - 民主的な公共性にむけて』(岩波書店、2008年)。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	研究内容、議論の構成力等
平常点評価 Class Participation	70 %	レジュメ、発表、議論への参加等
その他 Other	%	

備考
Note

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
305	国際政治経済学演習 (貞廣彰)	通年	3年以上：4単位	貞廣 彰 政政・経演・国演

副 題
Subtitle 日本経済の現状分析と展望

授業概要
Course Description

本演習は刻々と変化する日本経済と世界経済の動向を経済学の視点でもって解剖する素養を学ぶことを狙いとする。いうまでもなく、現実の経済はさまざまな要因（財政・金融面、雇用・労働面、人口動態や企業行動など）が複雑に絡み合っていて循環と成長をしている。また、IT化、グローバル化、高齢化という世界の潮流変化の中で日本経済はさらなる変革をせまられている。

こうした複雑にからみあう現実の経済現象を理解して将来を展望するために、本演習では、（１）現実のデータをグラフに描いて冷静に眺めるといふ経済分析の基本姿勢を貫きながら、初歩的な経済理論と客観的なデータに基づいて、議論を重ねることで、経済を見る眼を培っていく、（２）今後の財政改革、年金改革、規制改革などの重要なテーマについて論点整理と各自の意見を磨く、と同時に、（３）米国、欧州、アジア（特に中国）経済など日本経済へ影響を及ぼす国際的な事柄についても理解を深めていく。

教材としては「経済財政白書」、IMFなどの国際機関の文献を使用する。

授業の到達目標
Objectives 経済の専門誌をある程度読めるようになることを目指す。

授業計画
Course Schedule 第1回 - 第15回：春学期はWorld Economic Outlook を読む。
第16回 - 第30回：秋学期はターム・ペーパーの発表を行う。

教科書
Textbook(s) IMF, World Economic Outlook (最新版)

参考文献
Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	発表の中身。
その他 Other	%	

備考
Note タームペーパー（３年次）と卒業論文（４年次）は英語で書くことを必須とする。

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
306	国際政治経済学演習 (清水和巳)	通年	3年以上：4単位	清水 和巳 政政・経演・国演

副題
Subtitle

人間と社会の政治経済学

授業概要
Course Description

「不思議なものは多い。しかし人間ほど不思議なものはない」(ソフォクレス『アンチゴーン』)

古代から現代に至るまで、人間はあらゆる学問分野で最大の謎であり続けてきた。社会科学はとりわけ人間と社会の関係に興味をもってきた。スミスは人間が利己的に行動しているにもかかわらず社会が破綻しないことを、ヴェーバーは資本主義という特殊な社会経済制度を支える人間が西欧という地域で生じたことを、マルクスは人間が作り出した社会が逆に人間を疎外していくことを、彼らはそれぞれの謎に彼らなりの解答を用意した。とはいえ、こういう偉大な先達ととりくんだ大問題だけが謎なのではない。たとえば、海外旅行をしたときにあるレストランで食事をしたとしよう。「ここで食事することはおそらくもう二度とない」とわかっている、われわれはチップを払う。実はこれも(ある観点からすると)人間と社会に関する謎なのだ。

本演習の目的は、人間の意思決定・行動、その結果として生じる社会制度に関する謎を自分でみつけ、そこに社会科学的に切り込む方法を学ぶことにある。その際、「自分」にとっては謎だが、他人にはなぜそれが解くべき謎なのかが理解できない、「自分」はその謎に答えたつもりだが他人は納得しない、こういう事態は避けたい。したがって、演習参加者は少なくとも以下の3点に関して自問自答してほしい。

- なぜ(どのような立場からすると)その問題を「謎」ととらえることができるのか?
- もし、その問題が本当に「謎」であるなら、それにどのように応答することが社会科学と言えるのか?
- そもそも、社会科学的に思考するとはどういうことなのか?

授業の到達目標
Objectives

演習参加者は、自分の問題設定、問題の検討方法を他の参加者に理解させ、納得させために必要な技術や方法を身につける。

授業計画
Course Schedule

第1回：オリエンテーション
第2回：「読む技術」1
第3回：「読む技術」2
第4回：「書く技術」1
第5回：「書く技術」2
第6回：基礎的知識の講義1
第7回：基礎的知識の講義2
第8回：基礎的知識の講義3
第9-15回：各人の興味対象に応じた文献購読・発表
16回目-30回目は夏合宿での卒論計画発表をふまえて、各人に報告を割り当てる。

教科書
Textbook(s)

特になし。事前に、文献リスト、課題となる論文等を配布する。

参考文献
Reference Book(s)

第一回目のゼミナールにおいて参考文献リストを配布するが、制度の経済学、ゲーム理論、科学方法論などの分野を重点的に読んでいく。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備考
Note

学生に対する要望
(1) 質問がある場合、次のアドレス宛てにメールで問い合わせること：skazumi1961@gmail.com。
(2) 担当教員の「比較経済制度分析」を受講済みであること、加えて、ミクロ経済学、ゲーム理論、統計学、科学哲学に関する基本的な知識があることが望ましい。まだ「比較経済制度分析」を受講していない場合は、来年度受講することを強く勧める。

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
307	国際政治経済学演習 (須賀晃一)	通年	3年以上：4単位	須賀 晃一 政政・経演・国演

副題
Subtitle

現代社会の政治経済分析 - 公共性の実現に向けて

授業概要
Course Description

このゼミでは、公共性の政治経済学を求めて、広く現代社会が抱えるさまざまな問題を政治経済学・公共経済学の視点で考えてみたいと思います。現代社会の問題の多くは特定の観点から解決できるものではなく、複眼的視点に立って公共性の実現を目標に解決のルートを探るべきものであると考えられます。これまでに繰り返し指摘されてきた効率と公平の両立を図ることは重要な観点であり、皆さんに学んでいただければならない最小限の視点です。さらに、効率と公平を政治経済システム全体の中で、さらには時間的、空間的パースペクティブの中で考察することも重要な課題であるので、これを新たな課題としたいと思います。これまでに取り上げてきたテーマに照らして考えると、具体的なテーマは以下のようになるでしょう。

1. 地球環境問題と世代間倫理
2. グローバリゼーションとグローバル・ジャスティス
3. 少子高齢化と社会保障
4. 現代の貧困と労働問題
5. 資源と食料の政治経済分析
6. 教育の政治経済分析
7. 医療の政治経済分析

これらの問題に対して、明確な価値基準を設けて、公的制度を作るとか、当事者間の合意によりルールを設定することで解決するといった方向を探るのが、このゼミで用いる接近方法の特徴です。

ゼミでは、まず現代社会の問題群の中から自分なりのテーマを決めます。そして、それに応じて2種類の課題図書を指定します。1つは各自のテーマに関する中級のテキスト、もう1つは書評用の図書(新書程度)です。まず、書評を作成し、発表してもらいます。書評の作成およびテキストの要約は春休みの宿題です。次に、グループ研究を行います。各人の選んだテーマに従ってグループを作り、グループごとにサブテーマを決めて資料収集し議論・研究し、発表原稿を作成します。指定した中級テキストが資料収集の際に指針を与えてくれるでしょう。発表グループが進行役となり、ゼミでの議論を進めてもらいます。グループごとの共同研究の成果は共同論文にまとめます。

授業の到達目標
Objectives

共同論文の作成。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：自己紹介と今後の進め方
- 第2回：パワーポイントの使い方
- 第3回：書評の発表(1)
- 第4回：書評の発表(2)
- 第5回：書評の発表(3)
- 第6回：書評の発表(4)
- 第7回：書評の発表(5)
- 第8回：各班によるテキスト発表(1)
- 第9回：各班によるテキスト発表(2)
- 第10回：各班によるテキスト発表(3)
- 第11回：各班によるテキスト発表(4)
- 第12回：班研究のテーマ決定
- 第13回：各班での資料分析
- 第14回：班発表(1)、(2)
- 第15回：班発表(3)、(4)
- 第16回：夏合宿の反省と今後の課題の検討
- 第17回：班ごとの論文作成 - 中間発表に向けて - (1)
- 第18回：班ごとの論文作成 - 中間発表に向けて - (2)
- 第19回：各班の中間発表(1)
- 第20回：各班の中間発表(2)
- 第21回：オープンゼミ(1)
- 第22回：オープンゼミ(2)

- 第23回：班ごとの論文作成 - 最終版に向けて - (1)
 第24回：班ごとの論文作成 - 最終版に向けて - (2)
 第25回：各班の発表練習 - ISFJ政策フォーラムに向けて - (1)
 第26回：各班の発表練習 - ISFJ政策フォーラムに向けて - (2)
 第27回：班ごとの論文作成 - 政治経済学会論文コンクールに向けて - (1)
 第28回：班ごとの論文作成 - 政治経済学会論文コンクールに向けて - (2)
 第29回：4年生卒業論文へのコメント (1)
 第30回：4年生卒業論文へのコメント (2)

教科書
Textbook(s)

研究室のホームページを参照のこと。

参考文献
Reference Book(s)

研究室のホームページを参照のこと。

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	60 %	
平常点評価 Class Participation	40 %	
その他 Other	%	

備考
Note

ゼミの最終目標を卒業論文の作成に置きます。
 ゼミは通常の一方的な講義と異なり、皆さんが主役です。主役たる皆さん一人一人が積極的に参加しなければゼミは崩壊します。自分なりのテーマを持って自分で研究する態度を養い、他の人とできるだけ議論して下さい。常に「根拠は何か」と問う姿勢を持つことが大切です。この作業が就職してから大いに役に立ちます。

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/ksuga/>

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
308	国際政治経済学演習 (鈴木興太郎)	通年	3年以上：4単位	鈴木 興太郎 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

厚生経済学と社会的選択の理論

授業概要
Course Description

この演習では、厚生経済学と社会的選択の理論の基礎を学び、この理論に立脚して経済政策の批判的検討と建設的な立案に関するグループ研究と全体討議を行う予定である。議論の素材となる経済政策の具体例としては、福祉政策と競争政策を念頭においている。

授業の
到達目標
Objectives

厚生経済学と社会的選択の理論の基礎を確実に体得すること。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第15回：『社会的選択の理論・序説』を輪読する。
第16回 - 第30回：学生の関心に応じて課題図書を示して個別報告をさせ、全員で討議する。

教科書
Textbook(s)

鈴木興太郎『社会的選択の理論・序説』（2012年に東洋経済新報社より出版の予定）必要に応じてコピーを配布する。

参考文献
Reference Book(s)

鈴木興太郎（編）『世代間衡平性の論理と倫理』東洋経済新報社、2006年。
鈴木興太郎・長岡貞男・花崎正晴（編）『経済制度の設計と生成』東京大学出版会、2006年。
鈴木興太郎『厚生経済学の基礎 - 合理的選択と社会的評価 - 』岩波書店、2009年。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	報告の準備と討議への貢献に応じて評価。
その他 Other	%	

備 考
Note

学生に対する要望：参加する学生には、じっくりと腰を据えた読書と推論の姿勢を求めたい。また、ミクロ経済学の基礎を堅実に身に付けていること、公共哲学の基礎をしっかりと学習していることを期待している。

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
309	国際政治経済学演習 (唐亮)	通年	3年以上：4単位	唐亮 政政・経演・国演

副題
Subtitle 現代中国の政治経済と外交戦略

授業概要
Course Description 戦後のアジア各国は歴史、文化および政治経済体制に関して多様性を持ちながら、国家統合、経済開発および民主化といった共通の課題を抱え、それぞれのアプローチで目標の実現に向けて努力してきた。この講義は近代化のプロセス、社会の変動および体制移行の径路をキーワードとし、比較分析の枠組みを用いながら、経済開発・社会発展・民主化のアジアモデルへの接近を試みたい。特に、改革開放路線によってダイナミックな発展を遂げている中国に焦点を当て、内政外交の重大課題と政府の発展戦略を分析し、市場経済化、グローバル化、情報化および意識の多様化といった流れを検証し、中国の「実像」と「将来像」に迫る。

授業の到達目標
Objectives 現代中国の内政外交に関する幅広い知識を有するほか、多文化の視点、複眼的な分析能力を身に付け、質の高い卒業論文を完成すること。

授業計画
Course Schedule 第1回：Introduction
第2回 - 第6回：現代中国の政治権力構造
第7回 - 第11回：現代中国政治の展開
第12回 - 第16回：近代化路線の「光」と「影」
第16回 - 第21回：経済発展と社会の変容
第22回 - 第24回：政治改革と民主化運動
第25回 - 第30回：中国の対外戦略：近隣外交、日中関係、アジア共同体

教科書
Textbook(s) 受講生と相談の上で決める。

参考文献
Reference Book(s) 岩崎育夫『アジア政治を見る目』中公新書、2001年
武田康裕『民主化の比較政治 - 東アジア諸国の体制変動過程』ミネルヴァ書房、2001年
毛里和子『新版現代中国政治』名古屋大学出版会、2004年
唐亮『変貌する中国政治』東京大学出版会、2001年
毛里和子『日中関係 - 戦後から新時代へ』岩波書店、2006年

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	30 %	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	30 %	
その他 Other	10 %	

備考
Note アジア、特に現代中国に関心を持つ元気な学生の参加を大歓迎する。夏休みに自主参加の形で北京大学などとの共同セミナー、庶民生活の体験および社会観察などの自主参加プログラムを実施する。

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
310	国際政治経済学演習 (遠矢浩規)	通年	3年以上：4単位	遠矢 浩規 政政・経演・国演

副題 Subtitle

知的財産権・ソフトパワー・産業競争力の国際政治経済学 - コンテンツとテクノロジーが変える国際関係 -

授業概要 Course Description

国際政治経済学は、戦争や外交交渉のような目に見えるイベントだけでなく、むしろそうした現象の背後にある国際システムの見えざる「構造」や「過程」を可視化しようとする学問です。一見、天下国家の問題とは関係なさそうな、企業や個人や集団による日々の経済的・社会的・文化的活動が、生産や消費や貿易やコミュニケーションを通じて、実は国際的な「格差」や「支配」に繋がるような国際システムの大きな「構造」なり「過程」を形成していると考えます。そのため分析の対象は、しばしば国家や軍事的行動ではなく、貿易、海外直接投資、国際金融、技術移転、エンターテインメント、サブカルチャーなどの領域に及びます。

当ゼミでは、そのような国際政治経済学のアプローチによって、特に「知的財産権」、「ソフトパワー」、「産業競争力」の関係性に注目しながら、「テクノロジーやコンテンツ」といった『無体物』が市場価値の中心になるにつれ、国家はどこに向かうのか、国際関係はどのように変容していくのかを考えます。

授業は、関連する文献の輪読、チームに分れてのプレゼン・コンペ、論文作成指導の形で行われます。年度末に3年生は数ページのミニ論文を、4年生は卒業論文を制作・提出することが求められます。ミニ論文及び卒論のテーマは、国際政治経済学的なアプローチであれば、ゼミのテーマと異なる分野（例えば国際金融、環境政策、南北問題、地域統合、安全保障など）でも構いません。社会科学的方法（「仮説」を立てて「検証」する、「理論」を使う）を重視します。

（注記：知的財産権を学ぶのが目的ではなく、知的財産権やソフトパワーの議論を通じて国際政治経済学の理論や考え方を修得するゼミなので、知的財産権そのものへ深い問題意識や基礎知識は前提としていません。）

授業の到達目標 Objectives

(1) 国際関係を政治・経済・文化の相互作用に焦点を当てて理論的に分析する能力の獲得。

(2) 国際関係を、「特定の事件や現象」（イベント）からではなく、そうした現象の背後に存在する目には見えない「国際システムの構造や過程」から理解するセンスの獲得。

授業計画 Course Schedule

第1回：オリエンテーション。

第2回 - 第15回：文献の輪読、チーム対抗プレゼン・コンペ、論文作成指導。

夏合宿（9月）：プレゼン・コンペ（3年）、卒論計画の発表（4年）。

第16回：秋学期オリエンテーション。

第17回 - 第30回：文献の輪読、チーム対抗プレゼン・コンペ、個人テーマによる発表、論文作成指導。

教科書 Textbook(s)

（参考）2011年度ゼミの輪読文献（2012年度も使用する可能性があります）

小泉直樹『知的財産法入門』（岩波書店、2010年）

野口祐子『デジタル時代の著作権』（筑摩書房、2010年）

遠矢浩規「通商国家と知的財産権」（『知的財産法政策学研究』第34号所収、2011年）

ジョセフ・S・ナイ『ソフト・パワー』（日本経済新聞社、2004年）

岩淵功一『文化の対話力』（日本経済新聞出版社、2007年）

河島伸子『コンテンツ産業論』（ミネルヴァ書房、2009年）

リチャード・ローズクランズ『バーチャル国家の時代』（日本経済新聞社、2000年）

クリス・アンダーソン『フリー』（NHK出版、2009年）

タイラー・コーエン『創造的破壊 グローバル文化経済学とコンテンツ産業』（作品社、2,400円）

参考文献 Reference Book(s)

評価方法 Evaluation	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	論理性、独創性。(レポート=プレゼンのレジュメや論文)
平常点評価 Class Participation	50 %	意欲、議論への貢献。
その他 Other	%	

備 考 Note	<p>(1) ゼミは3年、4年合同で行います。</p> <p>(2) 正規のゼミとは別に、週に1回、ゼミ生が主体的に行う「サブゼミ」があります(全員参加)。サブゼミでは、正規ゼミの予習・復習、関連するテーマや文献の勉強会、プレゼン・コンペに向けてのグループ・ワーク、各種行事の準備作業などを行います。主に4年生が3年生を指導する形で行われます。</p> <p>(3) 夏季休暇中に2泊3日の合宿を行います。</p>
-------------	---

関連URL URLs for References	<p>ゼミ公式HP http://tohya.buzama.com/ (間もなくリニューアルします。随時確認してみてください。)</p> <p>ブログ http://blog.goo.ne.jp/softpower ゼミの様子・雰囲気がよくわかります。</p> <p>ツイッター http://twitter.com/#!/DrTohya</p> <p>フォトアルバム(1) http://picasaweb.google.com/112185018444596926613</p> <p>フォトアルバム(2) https://picasaweb.google.com/108147728885560821609</p> <p>(ブログ、ツイッター、フォトアルバムはゼミ公式HPからも入れます。)</p>
------------------------------	--

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
311	国際政治経済学演習 (内藤巧)	通年	3年以上：4単位	内藤 巧 政政・経演・国演

副題
Subtitle

国際貿易理論

授業概要
Course Description

国際貿易理論の英語論文6本以上を精読する。選ばれている6本の論文は、いずれも国際貿易理論の各分野における代表的な論文であり、世界中の国際貿易の研究者が理解しているべきものである。理論の論文を読むためには、数式を全て自力で導出し、かつその経済学的意味を直観的に説明できなければならない。また、分からない概念が出てきた場合、自分で他の論文や本を調べて解決しなければならない。報告者は事前に割り当てず、参加者の中からランダムに指名するので、全ての参加者は常に報告の準備をしておかなければならない。

授業の到達目標
Objectives

- ・経済学の学術論文を読めるようになる。
- ・経済学を研究するとはどういうことかを理解できる。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第5回 : Dornbusch et al. (1977, AER)
 第6回 - 第10回 : Jones (1965, JPE)
 第11回 - 第15回 : Krugman (1980, AER)
 第16回 - 第20回 : Brander and Spencer (1985, JIE)
 第21回 - 第25回 : Abe (1992, IER)
 第26回 - 第30回 : Acemoglu and Ventura (2002, QJE)
 時間が余れば、以下の論文に進む：
 ・Melitz (2003, EMA)
 ・Eaton and Kortum (2002, EMA)

教科書
Textbook(s)

なし。

参考文献
Reference Book(s)

- [1] Abe, K., 1992. Tariff reform in a small open economy with public production. *International Economic Review* 33, 209-222.
 [2] Acemoglu, D., Ventura, J., 2002. The world income distribution. *Quarterly Journal of Economics* 117, 659-694.
 [3] Brander, J. A., Spencer, B. J., 1985. Export subsidies and international market share rivalry. *Journal of International Economics* 18, 83-100.
 [4] Dornbusch, R., Fischer, S., Samuelson, P. A., 1977. Comparative advantage, trade, and payments in a Ricardian model with a continuum of goods. *American Economic Review* 67, 823-839.
 [5] Eaton, J., Kortum, S., 2002. Technology, geography, and trade. *Econometrica* 70, 1741-1779.
 [6] Jones, R. W., 1965. The structure of simple general equilibrium models. *Journal of Political Economy* 73, 557-572.
 [7] Krugman, P., 1980. Scale economies, product differentiation, and the pattern of trade. *American Economic Review* 70, 950-959.
 [8] Melitz, M. J., 2003. The impact of trade on intra-industry reallocations and aggregate industry productivity. *Econometrica* 71, 1695-1725.
 また、演習開始時点までに以下の教科書程度の知識を身につけておくべきである：
 中西訓嗣、広瀬憲三、井川一宏（編）、2003. 『国際経済理論』。有斐閣、東京。

評価方法 Evaluation	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	%	
平常点評価 Class Participation	100 %	・ 報告及び議論のパフォーマンスを総合的に評価する。 ・ 欠席 3 回以上で不合格。
その他 Other	%	

備 考
Note

- ・ 論文は大学のネットワーク経由で入手すること。
- ・ 毎回の準備に相当の時間と努力が必要なことを覚悟すること。
- ・ 準備は自分で行き、担当教員に頼らないこと。
- ・ 本気で経済学を研究したい学生しか本演習を志望してはならない。

関連URL
URLs for References

<http://www.f.waseda.jp/tnaito>

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
312	国際政治経済学演習 (深川由起子)	通年	3年以上：4単位	深川 由起子 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

現代東アジア経済研究：グローバリゼーションと新興経済の諸問題

授業概要
Course Description

東アジア（NIEs、ASEAN、中国及びインド）経済は各国の基礎条件の多様性が強調されがちだが、経済発展の歴史が積み重なるにつれ、グローバリゼーションへの積極的な参加、「圧縮された成長」がもたらす不均衡など、多くの共通点がみられる。機会でもあり、負荷でもあるグローバリゼーションの影響は先進国でも似ているが、経済規模が小さく、政治社会構造が未成熟な新興国への影響は一層、大きい。本演習は考察対象を東アジアに限定し、グローバリゼーションへの対応という点からその経済発展メカニズムを捉えて議論を進める。東アジアは言うまでもなく日本とますます深い経済相互依存関係にあり、同時代・近隣経済の生きた「現実」を理論との接点において掘り下げることを楽しみながら勉強を進めることにしたい。

授業の
到達目標
Objectives

前半はアジア経済の主要な構造問題、論点について基礎的な理解を深め、与えられた問いに沿って自分の論理を整理して述べられるようになること。問題意識を持って現代経済の諸問題を考えられるようになること。
後半は各国の事例を取り上げ、自分の仮説設定とその検証ができるようになること。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：東アジアの経済パフォーマンス
- 第2回：輸入代替工業化と輸出主導工業化
- 第3回：産業政策と技術移転
- 第4回：直接投資
- 第5回：国際分業と産業集積
- 第6回：金融抑圧と金融抑制
- 第7回：市場拡張型政府
- 第8回：金融自由化と資本の自由化
- 第9回：通貨危機
- 第10回：ファミリー・ビジネスと経済発展
- 第11回：構造調整（企業・金融部門）
- 第12回：構造調整（労働・社会部門）
- 第13回：体制移行経済
- 第14回：経済統合と開発
- 第15回：東アジアの地域協力
- 第16回：現地演習（1）*（備考参照）
- 第17回：韓国：キャッチアップ工業化の原型
- 第18回：台湾：中小企業と産業集積
- 第19回：香港／シンガポール：開放小経済のハブ機能
- 第20回：タイ：直接投資と技術移転の課題
- 第21回：フィリピン：経済開発と民主化
- 第22回：マレーシア：経済発展と社会的求心性の維持
- 第23回：インドネシア：権威主義体制と経済ガバナンス
- 第24回：中国（1）：漸進主義的改革
- 第25回：中国（2）：対外開放とグローバリゼーション
- 第26回：ベトナム：対外開放と後発の利益
- 第27回：インド：グローバリゼーションと産業構造転換
- 第28回：ASEAN：東アジア型経済統合アプローチ
- 第29回：現地演習（2）**（備考参照）
- 第30回：まとめと卒業論文研究計画検討

教科書
Textbook(s)

授業にて指示。

参考文献
Reference Book(s)

基本的には演習開始時のシラバス及びreading packetによるが、情報収集能力を高めるために主要Journalや文献をHPから探してダウンロードする作業を課す。

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	60 %	毎週課されるレポートの内容評価(A+からDまで)。
平常点評価 Class Participation	30 %	質問の適切さ、議論の構成、討議のリード力など。
その他 Other	10 %	現地演習や外部講師授業の運営、ゼミとりまとめへの貢献。

備考
Note

学生に対する要望：

国際経済学及び経済開発関連科目を履修済みもしくは履修のこと。現地演習を実施するので、現地を旅する体力と好奇心を持ち、分量の多い英語文献を読み、英語での討論ができること。TOEIC800以上か、留学・外国滞在経験者を歓迎、同時に社会科学のツールを使うことに興味があること。留学生は早い速度の日本語討論が併せて可能なこと。演習では問題意識を持って積極的に議論を展開できること。

現地演習(1)*：夏休み中に東アジアの代表的大学を訪問し、共通テーマについて発表、討論を行う(10年度はインドネシア、11年度は中国)。

現地演習(2)**：ソウルで実施(ソウル大学、延世大学、高麗大学とのインターゼミに東大、一橋大、慶応大と参加)。

関連URL
URLs for References

<http://fukagawaseminar.web.fc2.com/>

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
313	国際政治経済学演習 (最上敏樹)	通年	3年以上：4単位	最上 敏樹 政政・経演・国演

副 題
Subtitle

国際立憲主義の諸問題

授業概要
Course Description

国際法制度（国際法および国際機構）が国際秩序の形成にどのような役割を果たしているかについての基本文献を読み、教員との質疑応答を行い、参加者で討議する。それを踏まえて後半では、参加学生による研究報告もしてもらう。

文献としては、まずは担当教員のこれまでの研究成果を理解してもらうことが必要なので、教員自身の著書からいくつかを選ぶ。それを踏まえ、また参加者の学力レベルや意欲を見た上で、英語文献の輪読・討議なども加える。

国際法および国際機構論のいずれか、あるいはその両方に興味があり、かつそれらを総合した学習をしたいという学生諸君の参加を歓迎します。

授業の
到達目標
Objectives

国際法および国際機構論の中の、国際秩序に関わる現代的諸問題を学び、なぜ国際立憲主義を論ずべきなのかについての理解を深める。

まずは基本的な知識の習得および、この分野の方法論の学習が目的であり、それにそった文献の精読を行う。あわせて、それらをもとにした討議を行い、いかにして自分の議論を組み立てるかの訓練も行う。

現代的なテーマをもとに自由闊達な議論をすることも、この授業の目標である。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第6回：「人道的介入」（最上敏樹）を読み、討議する。

第7回 - 第12回：「国連とアメリカ」（最上敏樹）を読み、討議する。

第13回 - 第22回：「国際立憲主義の時代」（最上敏樹）を読み、討議する。

第23回 - 第30回：英語文献講読（候補：Barnett & Finnemore, Rules for the World, 2004）および受講者による報告

教科書
Textbook(s)

（上記「授業計画」を参照のこと）

参考文献
Reference Book(s)

（同上。必要に応じて追加します）

評価方法
Evaluation

	割合 (%) Percent (%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	50 %	
平常点評価 Class Participation	50 %	
その他 Other	%	

備 考
Note

上記「成績評価方法」はいちおうの目安であり、最終的には受講者と相談して決定し、通知します。

関連URL
URLs for References

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
314	国際政治経済学演習 (山崎眞次)	通年	3年以上：4単位	山崎 眞次 政政・経演・国演

副題
Subtitle

マイノリティ・ナショナリズムの研究

授業概要
Course Description

冷戦終結後の紛争は、国家間の争いより国家内の民族対立から多くが発生している。民族対立の大半は主権国家に対する国内少数派（マイノリティ）の異議申し立てである。紛争の原因は、宗教・習慣・言語等の違いから惹起される文化的摩擦、自治権・自決権の公平性や拡大という政治的要求、財源の公平な分配や地下資源の開発権等の経済的要求など、その紛争が起こる国や地域によって多岐に渡る。

なぜエスニック・マイノリティは主権国家に異議を唱えるのか、彼らの主張に正当性はあるのか、主権国家の対応は適切であるのかを検証し、問題の本質を理解した上で、紛争解決策を模索するのが、本演習の目的である。担当者は長年ラテンアメリカの地域研究に従事してきたので、その経験を演習では生かすつもりであるが、研究対象をラテンアメリカに限定するものではない。

キーワードとしては、人権、マイノリティ、民族紛争、多文化主義、ナショナリズム、リベラリズム、コミュニタリアニズム、先住民、ジェンダーなどがあげられる。

授業の
到達目標
Objectives

本セミナー参加者が、セミナーでの輪読、発表、ディベートを通じて、日常的に差別、侵害、暴力に晒されている民族的・社会的マイノリティの現状を認識し、そのような弱者の痛みを和らげ、問題を共有し、政治的、経済的、司法的、社会的解決策を提言できる能力を養うことにある。

授業計画
Course Schedule

- 第1回：オリエンテーション
- 第2回：提出された課題の検討
- 第3回：ナショナリズムの定義1
- 第4回：ナショナリズムの定義2
- 第5回：ナショナリズムの定義3
- 第6回：ナショナリズムの定義4
- 第7回：ナショナリズムの定義5
- 第8回：エスノナショナリズム1
- 第9回：エスノナショナリズム2
- 第10回：エスノナショナリズム3
- 第11回：エスノナショナリズム4
- 第12回：エスノナショナリズム5
- 第13回：エスノナショナリズム6
- 第14回：エスノナショナリズム7
- 第15回：春学期理解度の確認
- 第16回：リベラリズム1
- 第17回：リベラリズム2
- 第18回：コミュニタリアニズム1
- 第19回：コミュニタリアニズム2
- 第20回：多文化主義1
- 第21回：多文化主義2
- 第22回：多文化主義3
- 第23回：ポストコロニアル研究1
- 第24回：ポストコロニアル研究2
- 第25回：ポストコロニアル研究3
- 第26回：ポストコロニアル研究4
- 第27回：ジェンダー1
- 第28回：ジェンダー2
- 第29回：ジェンダー3
- 第30回：理解度の確認

教科書
Textbook(s)

加藤普章・吉川 元編、「マイノリティの国際政治学」、有信堂、2000年

参考文献

Reference Book(s)

3年生の基礎文献

B．アンダーソン「想像の共同体」、A．スミス「ネイションとエスニシティ」、A．ゲルナー「民族とナショナリズム」、C．テイラー「マルチカルチュラリズム」、W．キムリッカ「多文化時代の市民権」、J．バージャー「世界の先住民族」、山崎眞次「メキシコ民族の誇りと闘い」、E．サイド「オリエンタリズム」、江原由美子、山田昌弘「ジェンダーの社会学入門」、目黒依子「ジェンダー・システムと少子化」

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	学年末に提出する研究計画書。
平常点評価 Class Participation	60 %	2回の発表とディベートへの参加。
その他 Other	10 %	ゼミ合宿への参加。

備考
Note

学生に対する要望：マイノリティ問題に強い関心をもつ学生をもとむ。

関連URL

URLs for References

<http://members3.jcom.home.ne.jp/yamasin/>

<http://www.waseda.jp/sem-minoritygis>

国際政治経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
315	国際政治経済学演習 (若林正文)	通年	3年以上：4単位	若林 正文 政政・経演・国演

副題
Subtitle

台湾地域研究から近現代東アジアの問題群にアプローチする

授業概要
Course Description

台湾地域研究関連文献の輪読・討論を出発点として、東アジアにおいて個性的な歴史を経験している台湾という地域とその複雑な対外関連性（日中台、米中台の三重のトライアングルと日米中関係）とを手がかりに東アジア地域への理解を深め、この地域の近現代が抱えている問題群・課題について考えていく。想定される問題群には、（１）広域秩序主体（「帝国」）の興亡、（２）戦争と平和、（３）グローバリゼーション、（４）地球政治空間の国民国家化、（５）不均等・跛行的に展開する近代化、などがある。台湾から入り、東アジアに自分の「地域」と「問題」を見つけ、それをゼミの中で表現し、最終的なゼミ論に繋げていく。

授業の到達目標
Objectives

台湾研究関連文献の輪読などで身につけた知見から出発して、問題発見、調査、口頭発表、学術論文の執筆の一連の知的スキルと知的態度を見つける。この点から、予備論文（三年次）、ゼミ卒業論文（四年次）作成・提出を必要とする。

授業計画
Course Schedule

第1回 - 第2回：イントロダクション：学術論文とはどういうものか、どのように書くのか？
第3回 - 第5回：台湾を知ろう：ファーストステップ
第6回 - 第8回：台湾を知ろう：セカンドステップ
第9回 - 第11回：「広域秩序主題の興亡」問題群の探求
第12回 - 第14回：「戦争と平和」問題群の探求
第15回：総合討論
第16回 - 第19回：「グローバリゼーション」問題群の探求
第20回 - 第23回：「地球政治空間の国民国家化」問題群の探求
第24回 - 第27回：「不均等・跛行的に展開する近代化」問題群の探求
第28回 - 第29回：参加者研究報告
第30回：総合討論

教科書
Textbook(s)

まず若林正文の『台湾 変容し躊躇するアイデンティティ』（中公新書）、周婉窈『図説台湾の歴史』（平凡社）を手がかりに同『台湾の政治 中華民国台湾化の戦後史』（東京大学出版会）を読破する。その後は、ステップ毎に指定する。またこういうものを輪読したいという参加者の提案を歓迎する。

参考文献
Reference Book(s)

評価方法
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	30 %	
平常点評価 Class Participation	70 %	
その他 Other	%	

備 考
Note

これまでの基礎知識は問わないが、これからの学習に対する強い意欲と好奇心ならびに知的柔軟性と何冊も本を読み抜く持久力を求める。無断欠席3回以上で、評価の対象から外す。参加者の意欲次第であるが、適切なタイミングで台湾へのゼミ旅行の実施も考えている。必須条件はしないが、中国語閱讀能力のある諸君を歓迎する。

関連URL
URLs for References